



青少年赤十字 モデル校報告書集(平成24年度版)



青少年赤十字の目的は、

児童・生徒が赤十字の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できるよう、日常生活の中での実践活動を通じて、生命と健康を大切にし、地域社会、世界のために奉仕し、世界の人々との友好親善の精神を育成することです。

このため、3つの実践目標を提示しています。

1. 健康・安全 —— 生命と健康を大切にする。
2. 奉仕 —— 人間として社会のため、人のために尽くす責任を自覚し、実行する。
3. 国際理解・親善 — 広く世界の青少年を知り、仲良く助け合う精神を養う。

青少年赤十字では、児童・生徒が自主的で、
自律した生活態度を養うために、

「気づき」

「考え」

「実行する」

という態度目標を掲げています。

はじめに

青少年赤十字モデル校の制度は、全国の青少年赤十字加盟校の中から、先進的または参考となる青少年赤十字活動を実施する学校を選考し、2年間モデル校として指定し、同校の更なる活動の活性化や地域への活動の理解促進を図るなど、青少年赤十字活動の振興を目的に平成17年度から始められました。

青少年赤十字は、生命の大切さを理解し人間の尊厳を守る心、すなわち人の痛みが分かり、人を思いやることのできる心をもった青少年の育成を目的としています。そのために「健康・安全」、「奉仕」、「国際理解・親善」という実践目標を持ち、活動に当たっての態度目標として「気づき、考え、実行する」を掲げています。

これらは、生命の教育、心の教育、生きる力の育成という点で学校教育が目指していることと共通しています。

青少年赤十字は、この目標を実現するため、そのよりどころとなる価値（赤十字の理念）やそれに付随するさまざまな教育的手法、研修や教育資材、人的な支援などまとめた体系を提供しています。これらは青少年赤十字に加盟するメリットとなるものですが、特にこれから青少年赤十字活動を導入しようと考えている学校や、加盟しているけれどもなかなか活動の一步が踏み出せないという学校、また今後新たな活動を模索している学校にとって、そのメリットが具体的にどう生かされているか、教科や学校・学級運営にどのように活用されているかを知る材料として、このモデル校報告書集を活用いただきたく、作成いたしました。

これらモデル校には、毎年全国から10校を指定しています。この報告書集では、平成22年度・23年度に指定したモデル校の活動概要が紹介されています。

青少年赤十字を第一線で指導される先生方、さらにまた青少年赤十字活動を支援してくださっている教育機関の先生方をはじめ関係者の皆様にとって、本報告書集が青少年赤十字活動の理解と活動の充実に向けての一助となれば幸いです。

最後に、本書の編集にご尽力いただきましたモデル校選考会の先生方、活動事例のご報告をいただいた先生方に深く感謝申し上げます。

平成24年12月

日本赤十字社

目 次

はじめに……………	1
『青少年赤十字モデル校報告書集（平成 24 年度版）』の使い方 ……	3

小学校の部

福島県	くにみ ふじ た 国見町立藤田小学校……………	6
千葉県	か とり ふ ま 香取市立府馬小学校……………	9
新潟県	じょうえつ こく ふ 上越市立国府小学校……………	12
岐阜県	は し ま ちゅうおう 羽島市立 中 央小学校 ……	15
和歌山県	わ か や ま だいしん 和歌山市立大新小学校……………	17
大分県	ひ た かま で 日田市立鎌手小学校……………	18

中学校の部

山形県	ひがしね じんまち 東根市立神町中学校……………	22
福岡県	みやわか わかみや 宮若市立若宮中学校……………	24

高等学校の部

茨城県	た が 県立多賀高等学校……………	28
-----	-------------------------------------	----

幼・小・中学校の部

沖縄県	ざ ま み あ か 座間味村立阿嘉幼・小・中学校……………	32
-----	---	----

日本赤十字社本社・各都道府県支部所在地一覧……………	35
青少年赤十字モデル校選考会選考員（平成 17 年度～平成 24 年度）…	36

『青少年赤十字モデル校報告書集（平成24年度版）』の使い方

報告書集に何を期待するのか

この報告書集に取り上げられた活動からは、青少年赤十字のメンバーである児童・生徒たちをはじめ、指導者の先生方、さらには活動を支えてくださる地域の方々の考えと行動の息づかいが伝わってきます。これらの活動にヒントを得て、さらなる活動への意欲がかきたてられ、青少年赤十字の活動や活動の場が無限に広がっていることを感じる事ができれば幸いです。

赤十字の世界では、「人道の四つの敵」として、「利己心」「無関心」「認識不足」「想像力の欠如」を挙げています。私たちの実践活動が、それらにどのように取り組み、そしてメンバーである児童・生徒たちの成長に有効なものとなるかを本書を通して感じとっていただきたいと思います。そして、課題解決のヒントを発見したり、新たな発想での活動の創造の一助にさせていただきたいと願っています。

○報告書集の構成

- ・活動の単位、期間、教育課程上の主な位置づけを、表題の後に統一して表示しました。通年の活動か一回の活動かなどが一目でわかります。
- ・「ねらい」や「ポイント」の欄を設置することで、何をねらいどのように活動を組み立てるかを読み取ることができます。
- ・アドバイスとして、選考員のコメントを掲載しました。

○研究や情報交換の出発点として

- ・本報告書集は読み易さを配慮したため、紙面の都合でモデル校の意を十分尽くせないものが多いかもしれません。日本赤十字社を通じて、是非学校同士でも情報交換を行ってください。
- ・研究発表会やモデル校視察など相互訪問の資料に活用し、互いの情報交換をするのもマンネリ対策として有効です。

◎お待ちしております

- ・青少年赤十字モデル校に関するご意見、提案など何でも結構ですので、日本赤十字社の青少年・ボランティア課にお寄せください。

日本赤十字社 総務局 組織推進部 青少年・ボランティア課
住所 〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3
電話 03-3438-1311（代表） 03-3437-7082（ダイヤルイン）
H P <http://www.jrc.or.jp>

著名人の言葉

Phrases on the Red Cross Movement by the World celebrities

赤十字は信念と行動の合体である。そこに青少年が加わるとき、青少年独特の誠実、純真、率直を持ち込むことになる。この特質は機を得て偉大なる力を発揮するものであるが、青少年赤十字こそは、この機会を青少年に与えるものである。

レネー・サンド
(元赤十字社連盟技術顧問)

小学校の部



思いやりのある児童の育成

青少年赤十字の活動を通じて

福島県 くにみ ふじた 国見町立藤田小学校

活動の種類

健康・安全、奉仕、
国際理解・親善

活動の単位

全校・学年・学級

活動期間

通年

教育課程上の主な位置づけ

各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間等教育活動全般を通して

活動のねらい

日々の教育活動の実践を通して、児童が自ら考え、判断し、実現する「生きる力」の育成を目指し、計画－実行－評価の機能を生かして自己実現を図ることをねらいとしている。また、学校教育全体や地域生活の中で、社会奉仕的な体験活動や自然体験的な活動を通して、豊かな学びや児童の内面に根ざした道徳性の育成が図られていくことを目指していけるととらえた。

具体的な活動内容

○「健康・安全」部、「奉仕」部、「国際理解・親善」部を作り、部ごとの取り組みで研究を実施した。内容は昨年度に準じて実施したが、改善できる点については、改善を加えて実施した。

【「健康・安全」部 活動の実例】

1) 活動名 【避難訓練】(学校行事)

1. 活動のねらい

- 地震等の災害発生時の想定に対し、教職員の指示に従って速やかに避難できるようにする。
- 地震等の災害から児童の生命・安全を守るために「藤田小学校危機管理マニュアル」に基づいた教職員の対応について訓練をする。

2. 活動の工夫点

- 児童を校庭へ避難させた後、消防署の署員より、災害時に身を守るための具体的な指導を受けることで安全に対する理解が深まり継続的に実践できるようにする。

3. 活動の実際

- 児童の誘導も静か、かつ速やかに行うことができ、教師の役割分担もマニュアルに基づき実施できた。
- 東日本大震災の経験を想起しながら、具体的な場面での対応の仕方を教えてもらえたことは児童にとって有意義であった。煙の中を歩く体験も児童の安全に対する意識を高める上で有効だった。
- 訓練時だけでなく、日常的に防災意識をもち、常に自分の命を守るための工夫が必要である。



避難訓練

【「国際理解・親善」部 活動の実例】

1) 活動名 外国語活動

1. 活動のねらい

- 外国語を通じて、言語や文化への理解を体験的に深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。
- 外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しみながら、コミュニケーションの能力の素地を養う。

2. 活動の工夫点

- あいさつや表現活動を通して、外国の人々や異文化の中に自分と共有される多くの感性や思いがあることに改めて気づかせ、国際理解に努めようとする心情を育てる活動を多く取り入れていく。
- 単なるコミュニケーションの手段としての外国語の習得という側面だけでなく、日本と外国の文化の違いを感じ取らせ、逆に日本の文化や習慣をALTの先生に教えるなどといった活動を積極的に取り入れるなどして、双方向的な活動になるようにする。
- フォニックス指導を取り入れ、外国語に慣れ親しむ場面を取り入れる。

3. 活動の実例

《5～6年生》

町教育委員会から派遣されている日本人英語助手の遠藤先生と、年間30時間の英語活動に取り組んだ。英語のあいさつ・天気・曜日・アルファベットや単語の発音に至るまでの基本的な内容を押さえつつ、ジェスチャーゲームなどを取り入れながら、相手に自分の思いを伝える・相手の言いたいことを理解するというコミュニケーションの大切さを学ぶことができた。

昨年度からの活動を通して、友達の前でも物怖じせずに単語の発声やスピーチ、簡単な会話ができるようになってきた。外国の文化や歴史に触れる場面も設けながら、他者理解が深まるような授業構成の工夫をし、外国の人々に対する思いを育てていけるようにした。

《1～4年生》

中学校のALTの先生から英語での簡単なあいさつやゲーム・歌などを教えてもらいながら活動している。外国人の先生と直接交流をもち、歌や遊びを通して英語で話すことの楽しさを体得することができた。

2) 活動名 1年生を迎える会、6年生を送る会(縦割り班活動)

1. 活動のねらい

- 学校の特色を生かし、探求する価値ある主題を子どもたちと共に探り、自ら課題を見つけ、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する子どもを育成する。
- 学び方やものの見方を身に付け、問題の解決などに主体的・創造的に取り組む態度を育て、自分の生き方を考えたり、進んで地域に関わろうとしたりする資質を育む。

2. 活動の工夫点

- 縦割り班の活動を通して異学年の交流を図る。

○上学年は下学年の世話をしながら活動できるようにする。

3. 活動の実際

- 全校生が一堂に会す場面を設けるのではなく、縦割り班ごとに教室に集まり、小集団の中で活動を進めるようにした。計画の段階では、班長や6年生、5年生がリーダーシップを取り、班の中心に立ってめあてや活動内容等を決めていくようにした。手際よく活動を進めることができた。リーダーシップの育ちが出てきているのは大きな成果と考えられる。
- 活動を通して、副班長が1年生の教室まで迎えに行ったり、わからないところを教えてあげたりするなど、上級生が下級生の世話をするという意識が育ってきた。さらに、休み時間には上級生と下級生の壁を取り払い、一緒に遊ぶ姿も見られるようになってきた。
- あつかしタイムの活動を通して、下級生の世話をする意識が育ってきているが、一部の児童は下級生の世話をするとところまでには至っていない。また、設定された活動の中だけでは意欲的に活動できるものの、日常の活動場面において、自主性をもって、全員が活動できるようになっていくためには、指導の仕方を工夫する必要がある。

【奉仕】部 活動の実例

1) 活動名 ボランティア活動「だれかのために」

1. 活動のねらい

- 奉仕的な活動に加わる体験を通して、他者のために自分の力を生かせることの実感や楽しさを味わわせる。

2. 活動の工夫点

- 「幼稚園児」という、これまであまり交流をもたなかった人との関わりをもつ場面を設定する。
- 継続的な活動機会を設け、実践の定着化、また、意識の育ちを引き出せるようにする。

3. 活動の実例（5年生）

(1) 幼稚園に行きボランティアをしよう（H23. 1. 23）

- 隣接する幼稚園に行き、園児との交流を図る。グループごとに園児が喜んでくれることを考え、実践をした。児童が考えた活動は「折り紙・ぬり絵」「なぞなぞ」「手作り紙芝居の読み聞かせ」「おにごっこ・だるまさんがころんだ」で、賞状や賞品を作り、喜んでもらう工夫をする児童の姿が見られた。
- 園児の実態がなかなかつかめず、どのような活動を取り入れれば喜んでもらえるのかがなかなか考えられずに苦心したり、十分な計画を立てられないまま幼稚園を訪問することになってしまったので、十分に計画を練る必要があると感じた。



子どもたちと一緒に活動

(2) 幼稚園の豆まき集会に行きボランティアをしよう（H24. 2. 3）

- 前回の活動の反省を生かし、豆まき集会でのボランティアを

計画。オニ役として参加するだけでなく、その後で、オニに関する紙芝居の読み聞かせをしたり、節分の由来を教えたり、クイズを出したりして楽しませる姿が見られた。幼稚園児が自分たちの話を熱心に聞いてくれたり、活動を喜んでくれたりする姿を受けて、意欲の維持が見られた。

- 「喜ばせたい」「何かをしてあげたい」という気持ちが高まった。
- 児童の活動に対する温度差もあるため、一様に意欲を高めたり変容を期待したりすることは難しかった。



紙芝居を上演

(3) 幼稚園のお誕生会・ひな祭り会に行きボランティアをしよう（H24. 3. 2）

- グループごとの企画・運営の実践ではなく、学級全体の活動として実施した。
- 幼稚園児と一緒にダンス「アブラハムの子」を踊り、一緒に楽しみ、最後には自分たちが折り紙で作ったメッセージ入りのひな人形をプレゼントした。相手意識をもって、相手のために自分ができる何かをやろうという意識が育ち、また、それをやることによって、自分に喜びや満足感・充実感が返ってくるということを学び取ることができた。
- グループごとの活動ではなく、学級全体での取り組みということもあり、温度差もなくなり、みんなが同じ気持ちで園児のことを考えた活動ができた。園児の目線に立ち、園児の気持ちを大事にしながら取り組んでいこうという姿勢も育ち、心温まるような雰囲気の中で活動を進めることができた。
- 今回は5年生だけの取り組みにとどまってしまったが、全学年で幼稚園との交流の機会をもち、全学年児童が思いやりの気持ちを育んでいけるような計画づくりを進め、研究を深める必要がある。

活動のポイント

青少年赤十字の活動を取り立てて行うのではなく、学校生活のすべての場面において「気づき・考え、実行する、振り返る」のサイクルを意識し、児童の指導にあたるようにした。

V・S活動においては、児童が主体的に企画・運営し、計画性のある活動になるように、教師側からも働きかけた。

人材活用においても、保護者や地域人材等、多くの人と関わらう場を意図的に持ちながら活動を進めていくようにした。

本年度は幼稚園との連携を密に持ち、幼小連携の視点から、児童の「思いやり」の心を育てていく取り組みを取り入れた。

活動の成果

- ・「気づき、考え、実行する、振り返る」のサイクルを意識した指導体制を年間計画に位置づける、実践することにより、計画的で系統的な指導を進めることができた。
- ・モデル校の指定を受け、教師間の実践に対する共通理解を深める研修を行ってきた。運営部を活用する体制により、運営

部主導で主体的に企画・運営がなされるようになってきた。「思いやりの木」も、マンネリ化を防ぐよう学期ごとに木に飾るカードが工夫され、児童の意識が持続されてきた。

また、運営部主任が「思いやりの木」のカードに書かれた内容をお昼の放送で紹介する取り組みが新たに行われ、児童の「思いやり」に対する意識の日常化・定着につながった。

- ・取り組んできた内容・実践を「赤十字 Q&A」の小冊子にまとめ作成した。冊子の作成により、指導者となる教師が同じ土台に立ち、共通認識のもとで指導に当たれるようになった。

モデル校指定後の変化

・児童の意識の変容

- 指定前に比べて、児童の「思いやり」が日常的なものとして育ってきた。

はじめは、「指示を受けてから」「やらされて」という面が見られたが、児童自身が気づき、考え、行動に移せるようになってきた。

・指導にあたる教師自身の変容

- 各教科、道徳、特別活動等、あらゆる教育活動を通して指導にあたるという教師自身の意識のもち方により、組織的で徹底した指導が可能になった。教育活動全般を通して、「思いやり」の気持ちを育てていこうというねらいを中核にし、一貫した指導が可能になり、共通理解のもと、全児童の指導にあたることができた。

・保護者・地域の変容

- 保護者や地域への情報発信により、活動に対する理解や協力を得ることができ、連携を図りながら、より充実した活動を展開することができた。

・協力体制・指導体制の充実・変容

- 関係諸機関との協力体制、ゲストティーチャーや専門的立場にある方と協力しての指導体制など、今後、継続指導を進めていくにあたっての下地づくりができた。

今後の取り組みの見通し

研究の成果を明確にし、定着させる。

- ・与えられて行動・実行に移す児童の育成で満足するのではなく、自ら考え、行動に移していけるリーダー性のある児童の育成を図っていけるように指導の充実を図る。
- ・主体的に行動する児童の育成を目指した指導の充実を図る。

選考員のコメント

青少年赤十字の態度目標に「振り返り」のサイクルを導入することにより、児童の「思いやり」に対する意識が向上し定着につながっていると感じた。特に幼稚園との連携を密にし、幼少連携の視点から児童の「思いやり」の心を育んでいく取り組みは効果的である。

青少年赤十字の3つの実践目標を各部で組織・分担したり、テーマに迫るために学校の全教育活動を通して取り組む手法は、「いつでも」「どこでも」「だれでも」実践できる取り組みとして、他校でも大いに参考になるものである。

気づき、考え、実行する子どもの育成

青少年赤十字の考え方を取り入れた学習活動の工夫

千葉県 香取市立府馬小学校

活動の種類

健康・安全、奉仕、国際理解・親善、赤十字の理念の学習

活動の単位

全校の取り組み、クラスの取り組み

活動期間

通年

教育課程上の主な位置づけ

特別活動、道徳、総合的な学習の時間、生活科、学校裁量活動

活動のねらい

平成 19 年度に奥田誠校長が本校に着任した。学校教育の中に、赤十字や青少年赤十字の理念、原則等を取り入れて、赤十字の諸活動を教育課程に位置づけて進めていきたいと、経営方針の中で述べ、そのことについて職員会議の中で検討し、青少年赤十字の採用校となった。本校にとって青少年赤十字に加盟して 5 年が経過しようとしている。

青少年赤十字の実践目標「健康・安全、奉仕、国際理解・親善」や、青少年赤十字の態度目標「気づき、考え、実行する」を授業や教育諸活動の中で実践することになった。

「気づき」の大切さや気づく生活から生まれる児童の主体性、相手のニーズに対応した思いやりの心を培うことは、本校の児童の実態から重要であることを職員で共通理解をした。本校のこれまでの活動を見直し、青少年赤十字との関連から教育活動の見直しを図っていった。

具体的な活動内容

1 これまでの教育活動の見直しと青少年赤十字活動との関連を洗い出す

2 赤十字、青少年赤十字の理論研修

- (1) 主題についての基本的な考え方
「生きる力」を「主体的に学ぶ力」と「お互いの良さを認め合う豊かな心」の両面から捉える。
- (2) 主体的な学習のあり方
「学びの過程」を明確にし、課題の見つけ方、計画の立て方、調べ方、まとめ方等、学習を支える様々な力の育成を図るため、一人一人にあった支援を行っている。
- (3) 『主体的な学習と「気づき・考え・実行する子どもの姿」』
『主体的な学習と「気づき・考え・実行する子どもの姿」』を明確にしていくために、総合的な学習の時間「おおくす学習」、生活科、特別活動、道徳等において、児童の自己評価を基本とし一人一人を連続的に見て取る評価を取り入れている。
- (4) 教育のサポートとしての青少年赤十字
教育の最終目的は、人生の最後に「生きていてよかった」と思えるように支援することだと考え、青少年赤十字の世界的な情報、積み重ねてきた技術、資料、人材等々を活用して自主性を育てる。
- (5) 青少年赤十字の考え方とその手法について
「赤十字の基本原則」は「青少年赤十字の考え方」と捉えている。

- ① 自主的で自律した子どもを育てる
- ② ボランティア・サービス（奉仕活動）による問題解決
- ③ 先見の重視
- ④ 指示のない生活
- ⑤ 待ちの姿勢
- ⑥ 赤十字の基本原則を活用する
- ⑦ 「人道の 4 つの敵」を克服する
- ⑧ 「気づき」の指導

- (6) 「国際人道法」と学習との関連（赤十字の理念・原則の理解）
主体的な学習活動にするために、人道の敵の克服を活用しながら子どもたちに具体的なねらいをもたせたいと考える。

《「JRC の時間」の位置づけについて》

- 「赤十字の理念・原則」と関連して、赤十字や青少年赤十字の基礎・基本となる考えや手法（VS 等）を実践する時間として、毎週月曜日の朝（8：00～8：20）の 20 分間を位置づけた。赤十字や青少年赤十字の理解に関する実践を行う時間である。

「赤十字・JRC の理解に関する活動計画」にそって、発達段階に応じた内容を展開することになっている。その内容は低・中・高学年別に活動計画を立て実施している。

- (7) 「防災教育」と学習との関連（健康・安全）

- 防災力と災害 ⇒ 自分にできること
- 災害に備えて

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災は、改めて、防災について考える機会を与えたとともに、災害に対しての十分な備えが重要であることが指摘された。本校は、学校における防災教育とともに、地域と連携した防災に対する備えの重要性を痛感した。これまで実施してこなかった避難の仕方等多岐にわたって想定し、想定外でしたと簡単にすませるわけにはいかない状況がある。

そこで、災害に対する基礎知識をまとめておくとともに、いざという時に役立つマニュアルや普段からの防災への取り組みや訓練が必要であると考えた。

次のような取り組み等のまとめをすることで、災害に備えることとした。

「災害とは何か」から始まって、災害に対する備えを中心にまとめ、実践することで、学校と地域が連携した活動を展開することが可能となる。



三角巾の使い方を学ぶ

- (8) 「福祉教育」と学習との関連（奉仕）

小学校の児童においては、多くの体験を通して、実際に行うことによって学ぶことが重要である。奉仕（VS）では、机上の空論でなく事実関係が明確であることや、相手のニーズとこうしてあげたいという欲求ともいえるデザイナーのバランスがとれていることが重要である。



応急手当の練習

- (9)「国際理解教育」と学習との関連（国際理解・親善）
自分のこと、自国のことをしっかりと知るとともに、他の国のことや他国の文化を理解する。



世界の国のことを調べる

3 道徳、特別活動、生活科、総合的な学習の時間を核とする 青少年赤十字活動の全体構想

4 道徳、特別活動、生活科、総合的な学習の時間と青少年赤十字活動との関連

5 授業実践

- 道徳、特別活動、生活科、総合的な学習の時間の教科等を通して、青少年赤十字の実践目標と赤十字・JRC の理解、健康安全プログラムの領域から、以下の研究目標、「気づき・考え・実行する」子どもの姿、研究仮説、研究内容での取り組みを行った。
- (1) 研究目標
 - 「気づき、考え、実行する」子どもを育成するために、青少年赤十字の考え方を取り入れた学習活動のあり方を実践を通して明らかにする。
- (2) 「気づき、考え、実行する」子どもの姿
 - 確かな実践力
 - ・自ら課題を持ち、主体的に追究し、進んで実践できる子ども
 - 豊かな心
 - ・互いに認め合い、協力し、相手の立場を理解できる子ども
 - ・ものごとに素直な気持ちで感動できる子ども
 - たくましい心身
 - ・最後まで自分の目標に向かってねばり強く努力できる子ども
- (3) 研究仮説
 - 児童の興味関心に基づいた学習活動を工夫すれば、自ら課題を持ち、主体的に追究し、進んで実践する子どもが育つであろう。
 - いのちの大切さと思いやりの心が深まるような体験活動を

取り入れれば、お互いの立場を理解し、認め合う心豊かな子どもが育つであろう。

- 一人一人の良さを見だし、その可能性を生かす支援を行えば、生き生きと学習に取り組めるようになり、目標に向かってねばり強く活動する子どもが育つであろう。

(4) 研究内容

- 青少年赤十字の考え方を取り入れた学習活動のあり方
 - ア 教科等と青少年赤十字との関連
 - イ 健康・安全、奉仕、国際理解・親善、赤十字の理念・原則の理解の内容を盛り込んだ「青少年赤十字年間活動一覧」の作成と見直し
 - ウ 体験的な活動を重視した指導法
- 感性を育てる全校活動や校内環境づくり
 - ア 赤十字マーチングバンド、全校集会等の実践を通して、豊かな人間関係の構築
 - イ 潤いを与える校内環境づくり

※授業実践の概略は以下を参照のこと。

研究領域「赤十字の理念・原則の理解」の取り組み（道徳）（主題名 ともだちだから 1年）

研究領域「健康・安全」の取り組み（防災教育）（学級活動題材名 こんな時どうする 3年）

研究領域「奉仕」の取り組み（福祉教育）（学級活動題材名 お年寄りともっと仲良しになる計画を立てよう 5年）

研究領域「国際理解・親善」の取り組み（国際理解教育）（生活科単元名 ともだちいっぱい〜いっしょに あ・そ・ば〜 2年）

研究領域「国際理解・親善」の取り組み（道徳）（主題名 世界の中の子どもたち 4年）

※ JRC その他の実践

- 赤十字マーチングバンドの実践
- 句会ライブの実践
- 車椅子介助体験
- 高齢者疑似体験
- 介護施設訪問
- 盲導犬
- 点字学習
- 非常食「ハイゼックス」
- 募金・救援金・義援金活動
- 東日本大震災の支援の取り組み



赤十字マーチングバンドの演奏

活動のポイント

- 授業実践等については、これまでの報告の中でふれてきたので、県や地区の活動等については、ここでは記載する。
 - ・千葉県では、千葉県青少年赤十字のつどいを開催し、全校種のメンバーが集って開催する。その中で、赤十字救急法コンテストを実施している。各校種のメンバーが一堂に会し、救急法コンテストの課題に即したコンテストを実施している。
 - ・県下 16 地区ごとに地区リーダーシップ・トレーニング・

センターを夏休みに2泊3日で開催し、赤十字奉仕団等の協力のもと実施している。

- ・冬休みには、県青少年赤十字スタディー・センターを実施している。
- ・国内・国際交流派遣事業を県青少年赤十字主催事業として実施している。

活動の成果

- 本校は地域に開かれた学校をめざし、地域に根ざした教育を推進している。青少年赤十字の活動を行うにあたり、多くの赤十字奉仕団の方々のボランティアに支えられている。また、保護者による学校支援ボランティアも多く存在し、教員や学校行事に対して協力を惜しまない。
- 本校は、青少年赤十字活動を機会あるたびに保護者や地域の方々に啓発することで、赤十字に対する理解と協力を得てきた。学校だよりでの発信をはじめ、PTA 集会や学校評価公表の機会に情報交換等を行うことができる。赤十字の活動に共感する保護者の中には赤十字ボランティアを希望する者もあり、モデル校の指定が赤十字活動の起爆剤となっている。
- 児童の意識も高く、進んで活動に取り組む児童が多くなっている。特に、今回の東日本大震災においては、被災した家も少なくないが、今、自分たちに何ができるかを考え、義援金集めのための募金活動が活発に行われ、街頭募金を主体的に行う児童が見られ、組織的に活動をしようとする児童が増えてきた。

モデル校指定後の変化

- これまで行ってきた授業実践やその他の青少年赤十字活動を更に踏襲するかたちで行うことが基本であるが、今年度の成果と課題をうけて、課題解決のための取り組みを行っていききたい。特に、保護者に青少年赤十字活動に対する理解と協力が得られた。来年度以降は、福祉教育推進校の指定を3ヶ年うけることになったので、青少年赤十字活動を基盤にさらに推進が期待できる。
- 子どもたちが積極的に取り組む姿勢が多く見られるようになってきたこのチャンスを生かして、子どもたちの思いや希望を組み入れながら、さらに発展推進できるよう、指導者として進めていきたい。また、同じ地域の4校の小学校も青少年赤十字活動の関心が高まり、他校を巻き込んだ青少年赤十字活動の推進が期待できる。
- 保護者や地域の方々の関心・意欲が高まったことを機会に、防災ボランティアや地域防災の推進のための組織の構築をめざしていききたい。現在新たな組織として、「府馬小学区まちづくり協議会」が設立され、平成24年度より具体的活動に入る。この機会に一層地域とともに歩む赤十字活動が推進できる。

今後の取り組みの見通し

- モデル校の指定が終わっても、この研究に多くかかわった指導者がたくさんいるので、継続研究や実践が可能となる。研究や活動の領域も更に幅広く行うことが可能である。
- 青少年赤十字の指導者として育った先生方が多いので、地区活動や県の活動の中核的存在として実践ができる。地区活動の活性化が図れると期待できる。
- 赤十字のネットワークを活かして、賛助奉仕団や地域の赤十字奉仕団の協力がより一層深まっていくことが予想できる。

選考員のコメント

奥田校長先生のリーダーシップにより、学校教育のなかに赤十字や青少年赤十字の理論研修を取り入れ、赤十字の活動を教育課程に位置づけ、先駆的で模範となる実践活動を行っている

素晴らしい取り組みである。

とりわけ、研究仮説をしっかりと立て、研究内容を吟味した、自主的な取り組みが目を行っている。同じ地域の小学校にも青少年赤十字活動の関心が高まり、広がりを見せている素晴らしい実践である。

「わたし」からの発信

ニーズを伝え 人の輪広がる 先見板

新潟県 上越市立国府小学校

活動の種類

奉仕

活動の単位

全校

活動期間

通年

教育課程上の主な位置づけ

全教育活動

活動のねらい

学校生活、地域での生活を自分たちの手でより過ごしやすいもの、豊かなものにするために、「ニーズの発見」をキーワードとした取組を推進する。

先見板の活用により、自分の周囲のニーズに気づき、ニーズに応じるための行動について考え実行する態度を養う。

具体的な活動内容

1 JRC について知ろう

児童が赤十字の精神を理解するためには、指導する立場である教職員が知識を得て日常を見直す必要がある。そこで、教職員に対し、赤十字の歴史・精神・JRC の目標等について研修する機会を設け、児童に伝えていくことの共通理解を図った。

年度始めの JRC 登録式では、校長が赤十字の歴史や精神、JRC 活動の意義等について講話をした。日常の学校生活で当たり前のように V・S 活動を行っている児童であるが、登録式では気持ちを新たに誓いの唱和、署名をする姿が見られた。全校で「誓い」の声を合わせることで JRC の一員として「気づき考え実行する」という意識を高めることができた。

また、JRC 担当職員が学年単位で JRC 活動についての学習会を実施した。赤十字の歴史、態度目標、実践目標、先見・V・S について説明したあと、身近な事象を例に挙げながら児童にどう行動したらいいのかを考えさせた。学習会後は、「ボールが散らかっているのに気づいたから片付けたよ。」「水道の水が出っぱなしだったから止めたよ。」という報告が増えた。

2 ニーズに気づこう・伝えよう～先見板の活用～

手を貸してほしいこと、一緒に活動したいことなどがあつたら、先見板への掲示により全校に呼びかける。その先見板を見て呼びかけに応じた児童により、様々な活動が展開された。

全校先見板は2か所の玄関に設置。昨年は、新たに各教室に学級先見板も設置した。学級内で気づいたこと、手伝ってほしいことについて先見板で呼びかけ、協力して実行、解決する。係・当番活動を中心に幅広く活用されている。

(1) V・S 活動

＜全校 V・S 活動～スイスイ V・S～＞

自分で考え必要だと思った場所を、自主的に清掃したり整理整頓したりする V・S 活動の時間を、毎月1回設定している。先見板を2か所の玄関に設置し、児童（主に JRC 委員会）、教師それぞれの立場で V・S 活動の時間に取り組んでほしい内容を掲示し呼びかけている。先見板を参考に、事前に自分の活動内容を決めて V・S 活動カードに記入。活動後には振り返りを行い、次の活動に生かせるよう工夫している。全校 V・S 活動は、児童が学校全体を見渡して、今必要なことは何か、自分ができることは何かを考える機会となっており、ニーズへの気づきを促す活動として定着している。

＜リース作り・サクラソウ栽培＞

クリスマスの時期、当校と様々な交流を行っている介護老人

保健施設の入所者さんに素敵なクリスマスリースを送ろう、という呼びかけに希望児童がたくさん集まった。児童は「入所者さんに喜んでほしい」という気持ちで心を込めてリースを作成して施設に届け、みなさんに喜んでいただくことができた。

また、「お世話になった6年生の卒業式を飾るためにサクラソウを育てよう」という呼びかけにも児童が集まった。苗を植え、自分の鉢を決めて水やりなどの世話を続けた。3月、大きくきれいに咲いたサクラソウには「ありがとう。おめでとう。」という下級生の思いが詰まっていた。サクラソウ栽培に参加した児童は、6年生に喜んでもらえ、卒業式という大きな行事に自主的にかかわったことで自己有用感を高めることができた。

＜アルミ缶回収＞

JRC 委員会が、環境美化とリサイクルの意義を先見板や校内放送で呼びかけ、全校でアルミ缶回収に取り組んだ。ポスターやチラシを作成し、活動の趣旨を全校・地域の方に伝えて協力をお願いした。玄関前に設置してあるアルミ缶回収 BOX は、古く傷みも目立ってきていたため、児童から「回収 BOX をリニューアルしよう」との声が上がった。全校に回収 BOX の看板用イラストを募集し、その中から選んだものを JRC 委員会が回収 BOX に描き、ペンキぬりをしてきれいに仕上げた。この取組により、全校児童のアルミ缶回収への意識が高まった。児童の呼びかけ、地域の方の協力があり、たくさんのアルミ缶が集まった。JRC 委員会で相談し、アルミ缶回収金は東日本大震災への義援金として被災地に送った。



アルミ缶回収

＜エコキャップ運動＞

<

○緑の羽根募金（5月）

1週間、朝の登校時にJRC委員会の児童が募金を呼びかけた。

○赤い羽根共同募金（10月）

朝の登校時に加え、学校行事「国府子どもまつり」のときもJRC委員会の児童が呼びかけ、保護者や地域の方の協力も得ることができた。

この他にも、入学式を飾る花の水やり、古封筒に宛名を書くための紙を貼る活動、椅子の足に付けるテニスボールを数える活動などでボランティアを募り、多くの児童が参加した。

全校で、学級で、ニーズに気づき取るべき行動を考え実践する姿が見られるようになった。

(2) あいさつ運動

あいさつ日本一を目指し、通年で取り組んでいる。JRC委員会の児童が、月・水・金の朝、のぼりやタスキを使って校舎内を巡回し、さわやかなあいさつを呼びかけた。あいさつポスターを作成して先見板に掲示したり、昼の放送でその日のあいさつの様子（よかったこと、学年の紹介）を伝えたりして、全校の雰囲気盛り上げている。

(3) 復興の折鶴 ～被災地の仲間のために自分たちにできることを考えよう～

東日本大震災直後、JRC委員会の呼びかけで児童は募金活動に取り組んだ。その後、8月に5年生の児童が数名、JRC上越地区指導者協議会主催のトレーニングセンターに参加した。トレセンでは、救援活動にあたった日赤の方から被災地の話を聞いたり、被災地の仲間に向けてメッセージフラッグ作りを行ったりと、今自分たちにできることを真剣に考える時間があつた。その経験を学校にもち帰り、活動に生かした実践がある。「復興の折鶴計画」である。

震災から半年が過ぎた頃だった。「何か力になりたい、何かできることはないか」児童は、じっとしていられない気持ちを話し合った。そして、復興への願いを込めて鶴を折り、被災地に送る活動に取り組むことにした。「心をつなげる折鶴を折ろう」というJRC委員会の呼びかけに全校児童が賛同し、学校を上げての大きな活動になっていった。

各学級で折った折鶴にはメッセージが書かれていた。「ずっと応援しているよ」「元気をとりもどしてください」など、児童の願い、思いが込められていた。時間を見つけ、家でいくつも折ってくる児童もいた。「国府子どもまつり」の際、玄関に折り紙を置き、趣旨を説明したポスターを貼っておいたところ、保護者や地域の方も折鶴づくりに参加してくれた。用意したかごは鶴ですぐにいっぱいになった。呼びかけた児童も嬉しそうだった。自分たちが発信した思いがみんなに伝わり、協力してくれる人の輪が広がっていったからである。

「ニーズを伝え、人の輪広がる先見板」この2年間で先見板の活用が定着してきた。人間として、社会のため人のために尽くす責任を自覚し、実行するという「奉仕」の心、指示待ちから抜け出し、自分で考え主体的に生きる力が、児童の中に育ちつつある。



復興の折鶴作成

3 学校にJRC活動を広げよう～教育活動にJRCの視点を～

(1) 総合的な学習の時間

5年生は総合的な学習の時間に、学校の隣にある介護老人保健施設との交流を続けている。訪問を重ねるうちに訪問に対する児童の意識が変わり始めた。始めは自分サイドで活動を考え、自分たちがやりたいことをしていたが、徐々に入所者さんとのようなかわりができるか、どうしたら喜んでもらえるかという相手意識が芽生えてきた。「入所者さんが喜んでくださるものを考えよう」つまり、ニーズ発見の必要性に気づいたのである。それからは独りよがりではなく、相手の気持ちを推し量り、喜んでもらえる活動や必要な活動を計画、実行していった。



国府の里訪問

訪問を通して、入所者さんの気持ちを考えて行動すること、入所者さんとは常に笑顔で目線を合わせて話すことが大切だ、と分かりました。そうすることで自分の気持ちが伝わりました。「入所者さんが嬉しいことは自分も嬉しい」ということを学びました。

（児童の感想より）

入所者さんにとても喜んでいただき、児童にとってこの交流は様々な人とかわかり心の成長を促す場、相手の気持ちを考えて行動する絶好の奉仕活動の場となっている。

(2) 特別活動

学級における毎日の係活動でも、JRCの精神を活かすことで自主性が育ってきている。4年生では、学級先見板と黒板を活用して、係からのお願いや連絡を発信してきた。その内容を見て学級の児童は、自分のすべきことを把握し実行することができた。また、係の活動内容については、学級内を見渡してニーズに合ったもの考えるようにした。自分たちで考えた活動だけをするのではなく、学級の友達からの要望を聞いたりアドバイスをもらったりすることにより、随時、活動内容の見直しを図り、内容や質を向上させることができた。先見板を活用した係活動の推進により、児童は自主的に見通しをもって行動する素地を身に付けることができた。

また委員会では、楽しく規律ある学校生活を目指して活動をしている。学校生活上の問題やニーズに気づき、みんなで話し合い、協力して解決することで学校生活が改善され向上していく。当校では、年度始めに委員会説明会があり、全校の前で委員長が委員会の活動計画や決意表明を行う。その場で質問や要望も受けるが、ご意見ボックスを設置して全校の声を吸い上げるなどの工夫もしている。玄関には各委員会が自由に使える先見板もある。自分たちの学校を自分たちで楽しく過ごしやすい場所にするため、活動内容にも創意工夫が見られるようになった。

(3) 異年齢集団活動

1年生から6年生までの異学年メンバーで構成している「なかよし班」。清掃や遊び、行事への参加など1年を通して様々

な活動を行っている。この取組を始めてから3年目になり、異学年とかかわる姿も定着してきた。なかよし班活動では学年、男女、個々には、考え、好み、体力などがそれぞれ違うことを前提とし、互いの立場を尊重しながら活動を進めている。人とかかわり方を学ぶ場、他者理解・親善の場となっている。

4 青少年赤十字上越地区指導者協議会事務局としての取組

(1) イトスギ贈呈式

12月、JRCのシンボルツリーであるイトスギを日本赤十字社新潟県支部より贈呈された。贈呈式には、日赤新潟県支部職員、日赤有功会会長が参加した。イトスギの苗木は、新潟県日赤有功会の協力を得て、ソルフェリーノの丘から採取された種子を播種・育苗したものである。今はまだ1年生の背丈くらいであるが、10メートル以上に成長する。児童は、JRCの精神を忘れず、イトスギのようにまっすぐたくましく伸びようと誓い合った。

(2) JRC 上越地区指導者協議会主催事業への参加

＊上越地区総会

＊上越地区リーダーシップトレーニングセンター

JRC活動（健康安全、奉仕、国際理解・親善）について理解を図るとともに実践力を養うことや、加盟校におけるJRC活動の活性化に向け、リーダーを養成することを目的に、上越地区JRC加盟校の児童を対象に実施している。当校からも5年生が10名参加した。

＊上越地区研究集会

活動のポイント

毎月第3水曜日に「スイスイV・S」として、「空は世界へ」をBGMに、15分間の全校V・S活動を実施している。児童はJRC委員会や学校・学級先見板での呼びかけ、各自の気づきにに応じて活動する。実施前後に「V・Sカード」への記入の時間を設定し、自主的に計画⇒実行⇒振り返りを行うことにより自己有用感を高め、次の活動への意欲付けを図るようにしている。

また高学年では、総合的な学習の時間や学級活動で、「ボランティアサービスシート」を活用した。ニーズの発見と解決方法を考え、実行に移すという過程を体験できて有効であった。

活動の成果

当校は、JRCに加盟して50年という歴史があり、上越地区JRC指導者協議会の事務局でもある。しかし、異動により職員が入れ替わるため、赤十字の精神の理解やJRC活動の推進が十分に継承されているとは言えなかった。そこでモデル校の指定を受けたことを機会に、全教職員で赤十字やJRCについて研修する機会を設けた。研修では、赤十字の精神、JRCの実践目標、態度目標に基づいて、学級・学年・その他の教育活動を見直し、意味付けを行った。

職員がJRCについて学んだことで、児童への働きかけや活動の意味付けが適切に行われるようになり、総合的な学習の時間での活動や児童会活動を中心に、実践目標・態度目標の実現に向けた取組が積極的に進められるようになった。

また、助成金の一部を活用して大型先見板を作成した。玄関に設置してニーズの発信、JRC活動についての情報（資料、写真等）提供に大いに役立っている。教師の働きかけや声かけもあり、児童は学校生活を見渡してニーズに気づき、それを発信することができるようになってきた。指示待ちではなく、自分で考え主体的に生きる力が育ちつつある。

活動の前後には振り返りの時間を設け、書く活動を位置づけた。自分の行動や気持ちを書くことで、心の在りようを見つめ自覚することができた。成長した自分を感じることで自己有用感が高まり、次の活動への意欲が高まった。



先見板

モデル校指定後の変化

- ・JRC活動に対する教職員や児童の意識が高まり、先見板の活用、V・S活動の取組などが全校体制で行われるようになった。ニーズに気づく目や心が育ってきている。
- ・日本赤十字社の関係機関との連絡体制ができた。JRC活動について有効な手立てを助言していただくことができ、活動の幅が広がって内容も深まった。
- ・モデル校の指定を受けたことや、当校のJRC活動の様子について保護者にアピールすることで、活動に対する理解と協力を得ることができた。アルミ缶やエコキャップ回収、募金、復興の折鶴作りなどで協力を頂けた。

今後の取り組みの見通し

- ・毎年、教職員の異動があるので、今後もJRCについて学習する機会を設定する。教職員の理解を促すことにより、JRCの視点で教育活動全体を見直していく。JRCの目指すところと合致する単元・題材を視覚的カリキュラム表に反映させることで次年度の教育活動へとつなげるようにする。職員研修を受けて、各学級でJRC活動の学習の時間を設け、児童の心の耕しを行う。
- ・JRC活動の推進を目指し、先見板の活用をより一層進める。テーマに沿って周囲のニーズに気づき、自分にできることを主体的に行おうとする心情を育むために、活動後は様子を写真や振り返りシートで全校に知らせ、全校児童の意識化を図る。先見板の活用を継続するために、JRC委員会やその担当者への引継ぎを確実に行うようにする。
- ・4月末の地区指導者協議会総会と、9月末の地区研究集会の際にはモデル校としての取組の成果と課題を報告し、モデル校の実践をもとに、自校の教育活動をJRC活動の視点で見直し、価値付けたり新たな方向を見出したりする場としていく。

選考員のコメント

「ニーズの発見」と「先見板の活用」が、国府小学校での青少年赤十字の特徴的な取組となっている。「国府子どもまつり」を通し、保護者や地域を巻き込んでの「復興の折鶴計画」の取組は、学習指導要領が目指す思考力・判断力・表現力の育成とも合致するすばらしい実践活動である。

JRC加盟の伝統校として、また地区の事務局校としての強みを生かし、先見板の活用をはじめ青少年赤十字活動をより一層推進し、他校にもその良さを広めていってほしいものである。

仲間のしあわせのために助け合おう

ともに生きる、福祉を学ぶ

岐阜県 はしま 羽島市立 ちゅうおう 中央小学校

活動の種類

奉仕、健康・安全

活動の単位

全校、学年、学級

活動期間

通年

教育課程上の主な位置づけ

特別活動、総合

活動のねらい

- (1) 福祉に関わる学習や調査、体験活動を通して、福祉をめぐる諸問題を児童が主体的に捉え、日常生活の中で積極的に取り組もうとする実践的な態度を育成する。
- (2) 高齢者や障害者に対する理解を深めると共に、訪問活動や地域でのふれあい活動において多くの人と交流をし、思いやりと感謝の心を育む。
- (3) 児童の自主的・自治的活動を推進し、仲間と共に身近なことから社会参加（貢献）していくことの大切さを感じ取り、積極的にボランティア活動をすすめる資質を養う。

具体的な活動内容

(1) くすのき学習：『福祉』＝4年生

くすのき学習（総合的な学習の時間）『福祉を学ぶ』では、福祉体験学習として社会福祉協議会の方や羽島ボランティア協会の方から「手話」と「点字」の手ほどきを受けた。手話や点字の意味や意義を丁寧に教えていただき、体験を通して学んだ。



点字学習



アイスクリーム体験

(2) 福祉委員会によるアルミ缶回収・ペットボトルキャップ回収・募金活動

児童の福祉委員会では、アルミ缶集めやペットボトルキャップ集めを全校に呼びかけた。その収益金などを社会福祉協議会やボランティア団体に送った。また、全校児童に募金呼びかけ、集まったお金を社会福祉協議会などに寄付した。また、牛乳パックリサイクルとして、全校のバック回収活動を行った。地域の業者さんと提携して、回収用の大型の袋を貸していただき、毎日給食委員会が中心となって清潔で円滑な回収を進めた。



アルミ缶回収

(3) 児童会を中心とした夢いっぱい活動

学級の仲間だけではなく、学年・通学班などで全校にも目を向けて、思いやりの心や仲間の言葉や行動のよさの輪を広げたり、自分や仲間がとった行動が喜びや感動を与えたことを知って自分の行動をよりよいものにしていこうと夢いっぱい活動を行った。具体的には、仲間のよいところみつけのカードに記入して、各階においてあるポストに入れ、それを企画委員会の子が集め、全校に紹介した。また、カードの枚数に応じて、夢いっぱいボードに花紙を張り、目に見える形にした。

(4) 児童会を中心としたあいさつ運動、花いっぱい活動、愛校活動

「あいさつ」「掃除」「授業」を中央小の3本柱としていこうと児童会を中心として取り組んだ。具体的には、児童会の企画委員会を中心としたあいさつ運動、栽培委員会を中心とした花いっぱい活動、6年生を中心とした校内美化のための愛校活動を行ってきた。

活動のポイント

- ・自分たちの身の回りでの気づきを大切に行ってきた。
- ・「具体的に何ができるのか」を行動と結びつけて明らかにして取り組むことができるようにした。
- ・講師の先生や高齢者体験セット、車いすなどは、社会福祉協

議会やボランティア協会などから紹介していただいたり、貸していただいたりした。

活動の成果

- (1) くすのき学習（総合的な学習の時間）『福祉を学ぶ』では、福祉体験学習として「手話」と「点字」の手ほどきを受けた。何よりも、手話や点字の意味や意義を丁寧に教えていただいたため、「共に生きる社会」に大切な心を感じ取ることができた。
- (2) 児童の福祉委員会では、アルミ缶やペットボトルキャップ集めを全校に呼びかけ、その収益金などを社会福祉協議会や福祉施設に贈った。また、牛乳パックリサイクルとして、全校のパック回収活動を行った。地域の業者さんと提携して、回収用の大型の袋を貸していただき、毎日給食委員会が中心となって清潔で円滑な回収を進めている。「共に生きる社会」に大切な心を感じ取り、そのために行動することができた。
- (3) 愛校活動を通して、みんなで使う場所の美化活動を行い、愛校意識や公共意識が高まった。
- (4) 心いっぱい活動を通して、思いやりの心や仲間の言葉や行動のよさを広げることができた。
- (5) 助成金を活用することにより、福祉に関する書物を購入し、調べ学習に利用することができた。また、デジタルカメラを購入することによって、活動したことを記録にまとめることができた。

モデル校指定後の変化

- ・愛校意識や公共意識が高まった。
- ・思いやりの心や仲間の言葉や行動のよさが広がった。
- ・「みんなのために具体的に何ができるのか」を考え、行動できる児童が増えてきた。

今後の取り組みの見通し

- ・活動の種類を「健康・安全」「奉仕」から「国際理解・親善」にまで広げ、青少年赤十字活動を通して、学校教育活動全般を活性化するための年間計画を作成し、活動の単位も「学級」から「学年」単位で取り組めるものにする。
- ・赤十字のネットワークを活かして、賛助奉仕団や地域の赤十字奉仕団の協力を求めていく。

選考員のコメント

「仲間のしあわせのために助け合おう」をテーマとして、青少年赤十字の実践目標である「奉仕」と「健康・安全」に重点を置き、社会福祉協議会やボランティア協会と連携しながら、福祉体験活動や各種回収活動など充実した青少年赤十字活動が展開されている。

児童会を中心としてさまざまな活動を計画的に実践することを通し、友達のよさを見つけたり、仲間と共に身近なことから社会参加（貢献）していくことの大切さを感じ取ったりするなど、積極的にボランティア活動を進める上で効果的な活動を行っている。

青少年赤十字活動

和歌山県 和歌山市立大新小学校

活動の種類

健康・安全、奉仕、国際理解・親善、赤十字の理念の学習

活動の単位

全校

活動期間

通年

教育課程上の主な位置づけ

特別活動、総合的な学習の時間

活動のねらい

赤十字の精神を正しく理解し、進んで活動することにより、将来世界の平和と人間の福祉に尽くそうとする児童を育てる。「気づき・考え・実行する」という行動目標を常に心がけ、身につける。

具体的な活動内容

- ①毎朝清掃時に青少年赤十字の歌を流し、朝の会で青少年赤十字の誓いを全員で斉唱した。
- ②赤十字集会 6月6日（水）午前8時20分～8時50分
赤十字委員会の児童が中心となって進行し、1円玉募金や寸劇を通して青少年赤十字の精神を学びあう赤十字集会を行った。
- ③赤十字集会時以外でも1年を通じて1円玉募金や古切手、使用済みテレホンカードを収集し、日本赤十字社に寄託する。
- ④8月17日（水）～18日（木）和歌山市立加太少年自然の家で行われた和歌山県青少年赤十字トレーニングセンターに参加し、他の加盟校の児童との交流を図った。
- ⑤5月30日（月）6限、2月8日（水）5限に校区内の公園に出かけ清掃を行う。
- ⑥3月11日の東日本大震災時や9月21日紀南地方の大水害時に、赤十字委員会が窓口になり、児童会によびかけて全校児童で募金活動に取り組んだ。



赤十字集会での劇

活動のポイント

全校で縦割り活動（なかよし）、委員会活動として青少年赤十字活動を行う。

清掃時や朝の会等の中で、やられている活動ではなく、ごく自然に学校生活の一部となるように取り組みを進めた。

活動の成果

委員会活動の一つとして児童会が主体的に取り組み、青少年赤十字のメンバーの一員であることを自覚することができた。また、活動は、縦割り班で行うため、1年生から6年生までのつながりを深めることができ、6年生もリーダーとしての責任を果たすことができた。

さらに、活動に対する地域住民の理解や協力が一層得られ、励みとなっている。



1円玉募金等を寄託



大新公園での清掃活動

助成金を活用することにより、清掃道具を購入し、利用することにより校区内の公園清掃奉仕活動を充実することができた。

モデル校指定後の変化

地域各種団体や保護者へ青少年赤十字の存在をアピールすることができ、活動に対する理解や協力を得ることができ、活動がスムーズに展開できるようになった。

モデル校として指定を受けたことで、青少年赤十字メンバーであることに、より一層の自覚が芽生えた。

今後の取り組みの見通し

モデル校指定期間終了以降も全校で縦割り活動（なかよし）、委員会活動として青少年赤十字活動を行う。

今後も地域各種団体や地域住民に青少年赤十字をアピールし、公園清掃などの地域と連携した奉仕活動を展開していく。

選考員のコメント

青少年赤十字の歌をBGMに毎朝清掃活動に取り組んでいること、朝の会で青少年赤十字の誓いを全員で斉唱していることに、まず感心した。こうした毎日の小さな積み重ねが、将来国際社会に生きる日本人としての自覚を身につける素地になるものと思っている。

赤十字集会、校区内の公園清掃奉仕活動、トレセン参加、募金活動を通して、青少年赤十字メンバーの一員であることの自覚が生まれると共に、活動に対する地域住民の理解や協力が一層得られ、励みとなっていることは誠に喜ばしいことである。

笑顔いっぱい 夢いっぱい 慈しみいっぱい 心通い合う学校 ～ハートフルレインボー「為すこと」から学ぶ子どもたち～

大分県 ひ た か ま で
日田市立鎌手小学校

活動の種類

健康・安全、奉仕、
国際理解・親善

活動の単位

全校

活動期間

通年

教育課程上の主な位置づけ

教育活動全体

活動のねらい

本校では教育目標「生きる喜びを共に分かち合う子どもの育成」をめざし、学びをくらしに生かす心・人のために尽くす心・命あるものを慈しむ心の育成に努めている。

これらの感性を育てる具体的な方法として、教育活動全体にJRCの精神と活動を重ね、地域との関わりを大切にしながら、体験を通して「気づき・考え・実行する」力を身につける。

具体的な活動内容

1 JRC 活動のめあて設定

学年ごとに今年度のめあてを設定する。設定しためあては各学年の教室および学校掲示板に掲示し、常にめあてに沿った活動ができているか確認していった。

2 JRC 加盟登録

指導者の方に赤十字活動についての説明をしていただいた。新1年生の胸に6年生がJRCバッヂを付け、これからJRC活動をしていくことを意識づけた。他学年もJRCバッヂを毎日つけることを確認した。最後に、JRC委員会の後につけて「誓いの言葉」を全校で読んだ。

3 朝のJRC活動

月曜と木曜日の8:25～35までの時間を全校児童がJRC活動をする時間と位置付けた。何をするかは個人もしくは学級に委ねられており、それぞれが「今必要なことは何か」に気づき、「どうすればよいか」を考え、実行していった。トイレや児童玄関前の清掃をする児童もいれば、図書室の本の整理をする児童、学級菜園の草取りをする児童、でこぼこのグラウンドに土を入れる児童もいるなど、その活動は多岐にわたって行われた。

4 校区クリーン作戦

年に2回、校区内のごみ拾いをチームと呼ばれる縦割り班ごとに担当場所を決めて行うことにしていた。しかし、1学期は度重なる雨天で中止となり、2学期のみの活動となった。校区内のごみはこのような取り組みが功を奏してか、活動を行うごとにその量が減ってきている。

5 東日本大震災でのボランティア活動についての講演会

7月9日、被災した地域にボランティア活動にいった日田市在住の方に、どのような様子だったか、そしてどのような活動をしたのかということをお話を児童に話してもらった。スクリーンに映る数々の画像を見たり、なかなか思うようにならなかったというがれきり処理等の活動の話の聞き取りして、その被害の大きさが改めてわかったようだった。

この講演会は、自分たちが被災地のためにできることは何か考えるとともに、自分が被災したときどのように行動すればいいか、ということを考えることにもつながった。本校であった地震時の避難訓練にも生かされた。



校区クリーン作戦

6 夏休み地区お役立ち活動

学校で身につけたJRC活動の精神を地域でも発揮すべく、夏休み期間に児童が住むそれぞれの地域でJRC活動を行った。公民館の掃除や花の水やり、地域でのごみ拾い、一人暮らしの高齢者の家の窓ふき等、多い地区では10回以上行った。また、その活動の後、そのまま公民館で勉強会をしたという地区もあった。

7 夏期リーダーシップ・トレーニングセンターへの参加

JRC主催のトレセンに本校の5年生6人と教諭1人が参加した。この体験を通して、「気づき考え実行する」の本当の意味を6人の児童は理解できたようだった。そして、この体験で学んだことを全校児童に伝え、今後の学校生活に役立てていこうとの思いを持った。

8 JRC 掲示板の設置

トレセンで学んだことの一つにJRC掲示板がある。すべての連絡はこの掲示板を通じて行われるのだが、本校ではJRC活動にかかわるものだけに限り、掲示板で連絡をすることにした。掲示板にはJRC委員会が主となって催す行事や活動のお知らせや、JRCの要素がある活動のお知らせ、JRC関連のポスターや赤十字についての豆知識等を掲示した。

9 各種招待状の送付、ポスターの作成

体育フェスティバルの2週間ほど前に、地区全戸に招待状を配布した。招待状は1～4年生が作り、ポスターを高学年が作った。全戸への配布は保護者にも協力していただいた。

10 文化フェスティバルでのJRC活動の紹介

文化フェスティバルでは各学年が地域や保護者の方に向けて出し物などをしたり、全校児童で合唱をしたりする。今年度はそれらに加えてJRC委員会によるJRC活動の紹介を行った。

11 ほのぼの音楽隊（市内の病院や施設への訪問）

12月23日、市内の福祉施設が主催する「ほのぼの音楽隊」に参加した。今年度が17回目となった。年々参加人数が減少

していく中、本校からは保護者や教職員を含め約 50 人が参加した。クリスマスソングを手話付きで歌ったり、ペンライトを揺らしながら歌ったりと児童自身も楽しみながら訪問できた。



ほのぼの音楽隊

12 地域のお年寄りへの年賀状送付

毎年、校区にすむ高齢者夫婦や独居老人宅へ年賀状を送付している。今年度は全校児童が取り組んだ。1人2～3枚程度をイラスト入りで仕上げ送付した。各世帯の住所の確認は各地区の自治会長さんに協力していただいた。どの方も本活動の趣旨を理解し、快く協力していただいた。

13 JRC 資源回収、子どものみの市

1月にJRC委員会主催の資源回収を行った。12月にJRC委員会が作った協力と呼びかける手紙を全戸に配布し、比較的アルミ缶やビンの消費が多いお正月明けに回収日を設定した。

地域や保護者の方々が協力してくださったおかげで、多くのアルミ缶やビンを集めることができた。

また、2月には運営委員会主催の子ども祭りという行事があり、その中で子どものみの市が開かれた。まだ使えるが自分にはいらなくなったものを児童が持ち寄り、それをのみの市で販売した。一つ一つの商品は1円～30円と比較的安価ではあったが、最終的に5700円の収益があった。

資源回収と子どものみの市で得た収益金で歩行器とドライヤーを購入し、大山総合福祉保健センターに寄贈した。なお、寄贈品は当該センターの職員の方に尋ねて選んだ。

14 馬頭琴の鑑賞会

2月に育友会の提案から、本校で馬頭琴の鑑賞会が行われた。今年度初めにモンゴルからトピックアルバムが届いたこともあり、児童はモンゴルに関心があったようだ。まず大山町に住む方に「スーホの白い馬」の読み聞かせをしていただいた。BGMで演奏者の岡林さんが馬頭琴を弾いてくださった。その後岡林さんによるモンゴルでの体験談や演奏を聴くことができた。馬頭琴の音色にも感動したが、児童や教職員が最も心を奪われたのは「ホーミー」と呼ばれる独特の歌い方だった。モンゴルに対し美しく壮大なイメージを持つことができた。



馬頭琴を鑑賞

15 チームなかよしフィールドワーク

2月24日、お別れ遠足があった。昨年は久留米市までスケートをしに行ったが、今年は日田市の観光地である豆田地区や隈地区に行くことにした。本校職員が夏に鹿児島であった指導者対象のトレセンで体験したフィールドワークを模した。

チーム（縦割り班）別に歩いて回るが、行き先（チェックポイント）は教えず写真の載ったプリントを与えた。児童はその写真を見て歩くべき道を選択していく。時折町の人に尋ねながらも、全チームが協力をしながら無事5つのチェックポイントに行くことができた。

あるチェックポイントでは思いづくりとして押し花でしおりを作成したり、またあるチェックポイントでは日田祇園祭りで活躍する山鉦を間近で見たりした。フィールドワークを楽しみながら、協力し、そして自分たちの住んでいる日田市のよさを実感することができた遠足となった。

16 福祉センター訪問

毎年2～3月に5年生が地域にある大山総合福祉保健センターを訪問して、お年寄りと交流をする。その時に、資源回収と子どものみの市の収益金で購入した品物を寄贈する。今年度は訪問を予定していた日に5年生の学級でインフルエンザが流行し、訪問を見合わせた。寄贈する品物については5年生の担任がドライヤーと歩行器各2台の目録を持って行った。また、交流の際お年寄りにプレゼントする予定だった5年生が作った折り紙の作品やミサンガもそれに添えた。今年度は夏に1～3年生も福祉保健センターを訪問し、交流を行った。

17 トピックアルバムづくり

昨年度トピックアルバムをチームごとに作成した。今年度は5年生がトピックアルバムを作った。昨年度は1つのアルバムを10人以上で作ったのに対し、今年度は1つのアルバムを2～3人で作ることにした。アルバム作りに携わる一人ひとりの責任を重くする一方で、楽しさも増したようだ。日本の文化や大山町、本校の紹介など外国の方に喜んでいただけるようなアルバム作りを心がけることができた。

18 JRC 委員会の活動内容

- ・JRC 旗の掲揚（毎日）
- ・朝の JRC 活動の呼びかけ、活動の様子の紹介（校内放送）
- ・各活動の企画、進行
- ・JRC 掲示板の整備

19 中庭の手入れ

助成金を利用し、中庭の手入れを行った。花苗を買い全校で花植えを行ったり、買った花を中庭や玄関、卒業式会場に飾ったりした。たくさんの花々が学校を彩ると児童もうれしそうにしていた。



中庭の手入れ

20 美化作業、ペットボトルキャップ集め

年2回、校内美化作業がある。保護者といっしょに中庭やグラウンドの草取りをした。児童では難しい作業は保護者が機械等を使ってきれいにしてくださった。

これまでペットボトルキャップ集めをしてきたが、労力の割に買えるワクチンの量が少なく、また回収してくれる業者もほとんどないということを考え、今年度で打ち切ることにした。代わりにJRCで取り扱う1円玉募金等、より効果的な方法を模索することにした。

21 義援金

本校の6年生は毎年竹炭作りをしている。できた竹炭は校区である「梅まつり」で販売をする。今年度も例年通り「梅まつり」で販売をした。その収益金は6年生の意向で、日本赤十字社を通じ、東日本大震災で被災した方への義援金にすることになった。

22 救急救命法講習会

夏休みは本校のプールを全校児童に開放し、その監視は保護者が当番ですることとなっている。そこで7月14日に保護者対象で救急救命法講習会を行った。講師は日本赤十字社にお願いし、日田市在住の方に来ていただいた。プールの監視の注意点やAEDも含めた心肺蘇生法の講習を受けた。近年、大分県でも痛ましい水の事故が起きており、保護者の方も不安があったようで、多くの参加があった。

活動のポイント

児童が主体的に活動するよう、JRC委員会からの呼びかけをするように心がけた。教職員が児童にやらせる活動ではなく、児童の気づきを大切に、それを認め実行していく、そのような活動を目指した。また、フィールドワークや掲示板の活用など、トレセンで学んだことを少しだが生かすことができた。

活動の成果

○助成金

プリンタなどのパソコン周辺機器をそろえることができた。それを利用して児童の活動の様子をすぐに印刷、掲示することで、JRC活動の足跡を残せるようになった。

また、保護者対象の救急救命法講習会での講師の方への交通費や、人工呼吸の実技講習で使う器具などを購入できたことは保護者の参加が多かった要因のひとつと言える。

中庭の手入れができ、花々が学校に増えた。

○活動の広がり

教職員もJRC活動に対する意識が高まり、フィールドワークを遠足に生かしたり、トピックアルバム作りを年間計画に位置づけたりした。

モデル校指定後の変化

モデル校の指定を受けて、まず教職員のJRC活動に対する取り組み方が積極的になった。

朝のJRC活動の時間も、だらだらと過ごすのではなく、教職員も児童といっしょにJRC活動をするようになった。いっしょにすることで、児童一人ひとりがどういう意識を持ってやっているかが把握できた。ただその時間をルーチンワークのように毎回同じ活動をして過ごす児童もいれば、「畑の草が多くなってきた」と気づき、みんなに声をかけ実行するという児童もいた。

児童が気づけない時は「なんで今日はそれをやっているの?」と投げかけ、その児童に自分の活動の意味を考えさせることもあった。また学級によっては朝の会でどんな活動をやったかを学級の友だちの前で発表させる時間をとったところもあった。そのように教職員が地道に働きかけたことで、自ら気づき考え

実行する児童が増えたといえる。まだまだ十分ではないが、確実に集団として成長していると思う。

それはJRC委員会についてもいえる。担当教諭がやるべきことを決めてさせるのではなく、何をすべきか、そのためにはどう働きかけるべきかを考えさせるようにした。特に6年生は自分がJRC活動を引っ張っていくと自覚するようになった。

また、6年生が義援金を送るために竹炭作りに一生懸命に取り組んだことも、意識の高まりを象徴する出来事だった。これも児童から言い出したことで、担任による誘導は一切なかった。モデル校の指定は今年度までだが、意識の高まりは今年度までとらないようにしていきたい。

今後の取り組みの見通し

助成金がなくなることで一部活動が小さくなる部分もあるかと思うが、基本的には今年度に準ずる活動をしていきたい。

本校は再来年度、同町内の小学校と合併することが決定している。他の2校はJRC活動をしていないが、進学先である大山中学校はJRC加盟校である。JRC活動をすることによる効果を考えると、合併後もJRC加盟校として活動をしていくことが望まれる。

選考員のコメント

JRC活動が教育活動全体に取り入れられている。教育目標達成のため日常的に生き生きとした活動が行われていることは、他校の模範となる。

中でも、地域でのボランティア活動は参考になる。「気づき、考え、実行する」態度を身につけ、人のために尽くす心や命あるものを慈しむ心が育ってきていることが伺え素晴らしい。

中学校の部



鳴瀬第二中学校への「支え愛プロジェクト」

東日本大震災から、生きるということを学ぶ～今、私たちができることは何だろう～

山形県 ひがしね 東根市立神町中学校 じんまち

活動の種類	活動の単位	活動期間	教育課程上の主な位置づけ
奉仕	全校	通年	特別活動

活動のねらい

1 ねらい：

宮城県東松島市立鳴瀬第二中学校への支援活動を通して、生きることの意味と私達にできることは何かを考えていく。

2 経緯：

本校では、毎年6月に行われる東根市主催の「さくらんぼマラソン大会」へ全校を挙げて参加している。活動内容は、事前の沿道の草取り、ランナーとして走る、またサポーターとして給水所のボランティアや、沿道で声援を送る等である。今年はこれまで以上にランナーとサポーターが互いの心を通わせる温かな空気が流れた。差し出す手に手を合わせ、笑顔を交換した。元気と勇気もらった。「私たちにできることはないか。」生徒たちから声が上がった。これまでの思いがさらに強まり、それが東根市と友好都市の宮城県東松島市立鳴瀬第二中学校への支援活動へとつながった。

具体的な活動内容

JRCの「知る・気づく」「考える」「実行する」の考え方で活動を推進してきた。特に「知る・気づく」の活動をしっかり行うことで、「実行する」場面における活動が自発的なものになっていくと考えた。

(1) 「知る・気づく」

- ①東日本大震災における津波の様子のDVD映像を視聴する。(地震を想定した避難訓練後)
- ②現地に向向いた職員から被災の状況や生活の実状を聞く。
- ③現地に向向きボランティア活動を行った方や東根市民体育館で炊き出し等の支援活動を毎日行ってきた地域の方のお話を聞く。

(2) 「考える」

- ①生きること、当たり前の生活ができること、私たちにできることは何かを一人一人が考える。
- ②一人一人の感想や考えをもとに活動内容を考える。

(3) 「実行する」

鳴瀬第二中学校と神町中学校の間に「愛」があるように、という願いのもと、生徒会とJRC委員会が中心となって生徒一人一人の考えをもとに「支え愛プロジェクト」を考案した。

「支え愛プロジェクト」の内容

- ①アルミ缶回収：回収したアルミ缶を換金し、義援金にする。
 - ・これまで毎月行っていたアルミ缶回収を、地域の取り組みに広げていく。具体的には、地域の人や商店に生徒が直接お願いし、回収する。
- ②節電：無駄な電力の消費をなくす。
 - ・学校生活で、これまで以上に節電に心がける。
 - ・夏休みに家庭で行う。家族が同じ部屋で過ごす、夜更かしせず早朝勉強する、ゲームやテレビ時間を減らす等、3つのコースから選択し、節電に取り組む。
- ③募金：生徒が募金する。
 - ・お小遣いからジュース1本を我慢する気持ちで募金する。
- ④ビデオレター：神町中生の思いをビデオに託して、元気を伝える。

【活動の実際】

- ①アルミ缶回収：半年で合計1,033kg(換金すると75,423円)ものアルミ缶を回収。8月のみで427kgを達成(250kgを目標に回収に臨んだ結果、前月比3倍の回収)生徒の思いが地域の方に伝わり、たくさんの協力を得ることができた。
- ②学校での節電：昨年度消費電力量と比較すると、17.5%の削減を達成(101,955円分)。本校は、夜間に体育館を地域団体に開放していることから、地域の利用者の協力も大きかったことがわかる。
 - 家庭での節電：全員が実施
- ③募金：生徒と職員の募金として88,113円が集まった。
- ④ビデオレター：鳴瀬第二中への応援メッセージとともに収録した。本校で運動会があった日、鳴瀬第二中でも運動会をしていると知り、鳴瀬第二中の方角を向いて、応援歌を歌ったことが心に残り、生徒が計画した。



鳴瀬第二中への応援



鳴瀬第二中への訪問

- ⑤鳴瀬第二中の生徒との交流：アルミ缶の収益金と募金を合わせ、計163,556円の義援金と、ビデオレターを代表生徒が鳴瀬第二中へ届けた。生徒たちは被災した様子を視察し、鳴瀬第二中の生徒と言葉を交わした。

(4) 交流後の活動

- ①伝えた：帰校した代表の生徒達は、全校生徒に状況を報告し、感じたことを伝えた。地域の方へ報告と感謝の意を伝え、11月の文化発表会に地域の方を招待することを計画した。生徒は学習の成果を披露するために合唱練習や準備に一生懸命に取り組んだ。
- ②2回目の鳴瀬第二中への訪問
- ・PTAの方々から声があがり、PTA主催でPTA対象に募金活動を行った。
 - ・10月以降のアルミ缶回収換金とPTAの募金、合唱のビデオレターを鳴瀬第二中へ届けた。
- ③野球部の交流：地区の野球大会に参加した鳴瀬第二中と、野球部同士が試合を通して交流を行う。

(5) 振り返り活動

- ・これまでの活動について振り返り、今後の活動につなげるため、感じ考えたことを記述した。

活動のポイント

- ・被災の様子をより詳しく知るために、講演者として日本赤十字社山形県支部の方や、近くの施設や被災地でボランティア活動を行ってきた蟹沢地区赤十字奉仕団の委員長さんを紹介してもらった。
- ・JRCの「知る・気づく」「考える」「実行する」の考え方を浸透させるために、JRC加盟登録式に山形県青少年赤十字の指導講師の先生に來校していただき、考え方等を話してもらった。
- ・活動してきたことを、JRCの「知る・気づく」「考える」「実行する」の考え方の流れで掲示し、意識付けを図った。その際、できるだけ生徒の言葉（感想等）を掲示するようにした。
- ・各活動を行う際に、生徒会役員やJRC委員が集会等でねらいを話すとともに、活動後に生徒の言葉で評価するようにした。また、生徒の活動を支え、価値を強化するために各学年・学級で教師から話をしてもらうようにした。その際、初年度なので同一歩調で進めるように教師側の指導ポイントを担当者が見守るようにした。
- ・地域との連携を強めるために、地域へのお便りの配布（お願いと報告、お礼）を、回数を重ねて行った。また、学校行事の文化発表会に地域の方を招待し、活動の報告とお礼等を行った。本校の体育館が社会体育で使用できるようになっているので、玄関に活動が見えるように掲示した。

活動の成果

- 生きることのすばらしさ、命の尊さを実感した。鳴瀬第二中の笑顔と力強く生きている姿に、改めて自分たちの生活を振り返る機会になった。「生きていることに感謝し、学習、清掃、合唱、当たり前のことをもっと真剣に一生懸命に取り組もう。今みんなで手をつないでいこう。」と自分たちの言葉で語れるようになった。
- 思いやりや感謝の心を育むことができた。また、地域とのかかわりが深くなった。アルミ缶の回収量が予想をはるかに超えて多かったことから、小さな営みは多くの人の手によって大きな営みになることを学んだ。また、地域の人に支えてもらっていることに改めて感謝できた。それが、地域の方を文化発表会に招待することにつながった。また、生徒の「皆さんのおかげで」という感謝の意を表す言葉を聞くことが増えた。
- 奉仕の精神が育まれつつある。アルミ缶をつぶせないお年寄りに「私がしますから大丈夫です。」と言えるようになった。

- 「鳴瀬第二中の人たちも頑張っているのだ。電気をつけなくて合唱練習をしよう」等という言葉も飛び交うようになった。
- 日常生活の中で、自分の役割（清掃や給食、係の仕事）を責任持って果たそうとする姿が多くみられるようになった。
 - これから「支え愛プロジェクト」でどんなことをしていきたいか、生徒個々が自分の考えを持てるようになってきた。

<生徒の感想より>

- ・東日本大震災を忘れない。そのために、もっと被災地のことを知る。「さくらんぼマラソン大会」に積極的に参加して、全国の人とさらに関わっていく。
- ・これまでの活動を一人一人がもっと気持ちを込めて続けていく。継続することが大事。
- ・神町中の一人一人の思いをしっかりと形として伝えたい。交流を深め、お互いのことをもっと理解し合う活動をしたい。
- ・私たち自身が、一人一人が周りの人のことを考え、思いやりをもって生活する。人の気持ちを考える活動をしていく。

モデル校指定後の変化

- ・生徒たちが様々な活動に主体的に取り組む姿が見られ、学校に活気が出てきた。運動会、文化発表会、合唱コンクールなどの学校行事に対し、より積極的に取り組むことができるようになった。学習や清掃等の日常の活動に落ち着いて取り組めるようになった。互いの思いを交わし合い、思いやり、協力し合うようになった。（アンケート調査を実施）
 - ・教員の「気づく・考える・実行する」「社会に貢献する・人のために働く」という意識が高まった。一人の人間として何ができるのか、また生徒に対してどんな働きかけができるのか等を、考えるようになった。校内の協力体制が確立し、指導者間の連携がより密接に図られるようになった。（アンケート調査を実施）
 - ・地域の方から、本活動に対する理解や協力を得ることができ、来年度以降の活動の下地ができた。
- 本活動に賛同したPTAの代表の方の申し出により、鳴瀬第二中学校訪問に同行し、被災状況や鳴瀬第二中の生徒の様子を視察した。このことがきっかけとなり、PTAが主体となってPTA対象の募金活動を行うことを計画し、実施した。

今後の取り組みの見通し

鳴瀬第二中学校の復興はずっと先のことである。鳴瀬第二中と神町の生徒たちの心がつながったことから、今後も継続して支援及び交流活動を行っていく。具体的には、今回の振り返りアンケートの生徒の考えを基に、これまで同様生徒主体で活動計画を立てていく。

選考員のコメント

東日本大震災被災地の宮城県鳴瀬第二中学校への「支え愛」プロジェクトは、生徒会、JRC委員会が中心となって生徒一人一人の考えをもとに立案し実践されていることは、他校にも大いに参考になる。

そのプロジェクトを通して「生きていることに感謝し、当たり前のことをもっと真剣に一生懸命に取り組もう。みんなで手をつないでいこう」と生徒が語るようになったことは素晴らしい成果である。

学校における青少年赤十字活動の日常化に関する研究

教育課程の工夫を中心として

福岡県 みやわか 宮若市立若宮中学校 わかみや

活動の種類

健康・安全

活動の単位

全校、有志

活動期間

通年

教育課程上の主な位置づけ

総合的な学習の時間、
特別活動

活動のねらい

- ア. 身の回りにある様々な「境界線」の存在に気づき、その是非を問う公平・中立について考える。
イ. 体験活動を通して、気づき、考え、実行するプロセスを身につける。

具体的な活動内容

【活動のねらい】

- ア. 身の回りにある様々な「境界線」の存在に気づき、その是非を問う公平・中立について考える。

1 各学年の学期ごとの人権学習

《学校目標》

人権問題をはじめ様々な人権課題についての理解と認識を深め、自らの課題として偏見や差別の解消に努めることのできる態度や能力を育てる。

- ※1年生→1学期（しんちゃんが泣いた）2学期（「菜の花」）3学期（ユニバーサルデザインって何）
※2年生→1学期（携帯電話は魔法のツール）2学期（「汚染め一揆」）3学期（解放令）
※3年生→1学期（共に生きるということ）2学期（現在に残る差別）3学期（進路実現に向けて）

2 文化祭 ミュージカル「魔笛」

3年生全員による文化祭でミュージカル「魔笛」を発表した。このミュージカルを通して生徒達に平和の尊さを考えさせた。1年前から生徒、職員、外部講師で内容が検討され、練習を積み重ね文化祭で披露した。

3 社会的な弱者とその保護者に関する学習

2年生で職場体験学習を実施した。この中で、保育福祉分野（主に保育園、幼稚園、老人ホーム）を独立させ、3年生で保育福祉体験学習を実施した。6月に観察実習を1日行い、9月に行う3日間の本実習までの間に「社会的な弱者とその保護者の考え方や行政施策」、「保育の考え方」、「幼児との接し方」などを学習した。学習に際しては「社会的弱者」という境界線について考えさせると共に、「強いものが弱いものを助ける」という強者の論理ではなく「相互扶助」の考え方を強調している。

【活動のねらい】

- イ. 体験活動を通して、気づき、考え、実行するプロセスを身につける。

1 生徒会活動に関すること

(1) あいさつ運動

本校の伝統である「校内であいさつをする習慣」を受け継ぎ、発展すべく生徒会を中心にあいさつ運動を行った。本校のあいさつ運動の特色は、校内で教師、先輩、来校者として違った時など学校生活すべての場面であいさつをすることである。

(2) 赤十字掲示板の設置・活用

生徒会役員と青少年赤十字担当教師が合同で、赤十字活動全般について掲示をし、青少年赤十字活動の普及・啓発に努める活動である。

(3) 募金活動について

- ・平成20年、博多にわか体験学習の際に、生徒会より自主的に街頭募金活動を行いたいとの声が上がし、福岡市の繁華街で街頭募金活動を行った。
- ・生徒達は「とても寒かった。」「初めは、恥ずかしかったけど、募金活動をして良かった。」と感想を述べた。
- ・平成23年3月11日の東日本大震災を受け、生徒会が中心となり義援金を学校で集める活動を行った。
- ・10月の文化祭でも生徒や保護者、地域の人や来客を対象に募金活動を行った。この日1日の募金総額は、10,505円であり、生徒達は予想以上に集めることができたことと喜んだ。集まったお金は、日本赤十字社に送金した。

(4) ハートキュービット大作戦

本校は、生徒会の呼びかけで全校で数年前から校区内の一人暮らしのお年寄りに、年賀状を送る取り組みを行っている。生徒達は、最初はお年寄りに何を書いたらいいかわからないと悩んでいたが、「自分のおじいちゃんやおばあちゃんに年賀状を書くつもりで書いたらいいよ。」とアドバイスをもらって、嬉しそうな表情で書き始める姿が見られた。

そんな中、数人のお年寄りから年賀状の返事が届いた。返事を読んで、「部活動のことが書いてある。」と、嬉しそうにつぶやく生徒もいた。また、野球部の生徒のために、お年寄りから野球のボールが1ダース届いたこともあった。

(5) ペットボトルのキャップ集め

5年前からペットボトルのキャップ集めを行っている。この活動は途上国に不足するワクチンの補充に役立ててもらうことを目的として、集めたキャップはエコキャップ推進協会に送っている。本校の自動販売機の傍らに常時キャップ用の箱を置いて回収している。また、家庭で集めたキャップを袋一杯持ってくる生徒もいる。また、文化祭ではその活動の写真を展示して、生徒や保護者、地域の人や来客にアピールしている。

キャップを箱に入れるとき、「これで途上国の子どもたちが助かるね。」などつぶやく生徒もいた。



ペットボトルのキャップ集め

(6) 資源回収（リサイクル活動）

平成 23 年 4 月から古紙、段ボール、ペットボトル、空き缶などをリサイクルするため、分別収集できるように玄関近くに袋を設置している。学校通信により、生徒や職員だけでなく、保護者も来校の際にリサイクルに協力している。

23 年度は、リサイクル活動で得た収益金 97,616 円を義援金として贈った。生徒はこの資源回収も義援金になることを知ると、「ペットボトルを持ってこよう。」と張り切っていた。

(7) ボランティア清掃について

生徒会の美化委員会の呼びかけで学期に 1 回と、有志によるボランティア清掃として、学校内外の清掃を行っている。ボランティア清掃は全校生徒の自主参加である。もちろん、職員も生徒と一緒に活動している。

活動中に地域の方から「ありがとう、ご苦労様。」と声を掛けられ、照れくさそうな仕草をする生徒の姿が見られた。

1 学期は、全校生徒の参加の割合は 40% 程だったが、2 学期の 11 月に行った活動では、62% の参加が見られた。

次は、活動後の生徒の感想である。

- ・ 地域がきれいになるから、またボランティア清掃をしたい。
- ・ 社会に貢献できる。
- ・ お礼を言われて、嬉しい。



ボランティア清掃



ボランティア清掃に多くの生徒が参加

2 有志生徒の活動に関すること

(1) 地元主催の川下りに手作りイカダで東日本大震災の復興の願いを込めた旗を掲げて、地元住民にアピールし、義援金を集めるために地元の犬鳴川のイカダによる川下りに参加する。有志の生徒と数名の職員でペットボトルを材料にして、イカダ作りを行った。

しかし、残念な事に当日は大雨のために中止になった。旗には『Friendship -絆- 若宮中学校』と記した。

(2) 花壇と緑のカーテンづくり

以前は高校の校舎だったため敷地も広く、花壇も多い。有

志生徒で玄関前のプランターの花植えを行った。また、特別支援学級では、畑で野菜づくりを行っている。

春から夏に向けて有志生徒で、事務室前に緑のカーテンづくりを行った。植物はゴーヤである。この緑のカーテンで、実際に室内の気温も 2℃ 程下がった。

3 教科、領域の授業に関すること

新しい学習指導要領でも記されている言語活動の充実を具現化すべく授業改善に取り組んだ。この活動は、自分の考えや気持ちを相手に的確に伝えるために必要で、生徒の思考力を育成するだけでなく、赤十字活動において重要な「コミュニケーション」を形成するために、特に重視すべきとの認識で進めた取り組みである。

(1) 教科の授業

本校の研究主題は「言語活動を活かした授業づくり」であり、副題を「考えをもたせ交流し、深める活動を通して」としている。特に「言語活動の充実」については、授業に次の 3 つの場面を設定することになっている。

- | | |
|--------------------|--------|
| ① 自分の考えを持つ場面 | → 気づき |
| ② お互いの意見を交流する場面 | → 考え |
| ③ 交流活動を通して考えを深める場面 | → 実行する |

この 3 つの場面は、上記のように、青少年赤十字活動の「気づき、考え、実行する」にもつながるものであると考える。

(2) 道徳

学校行事や総合的な学習の時間の学習場面と並行して、主として自他の関わりに関することの学習に主眼を置いた道徳授業を展開した。

(3) 特別活動

学級活動の時間に構成的なグループエンカウンターを用いた授業を行い、生徒達に学級の問題に気づかせ、問題解決のスキルを身につけさせるようにした。

活動のポイント

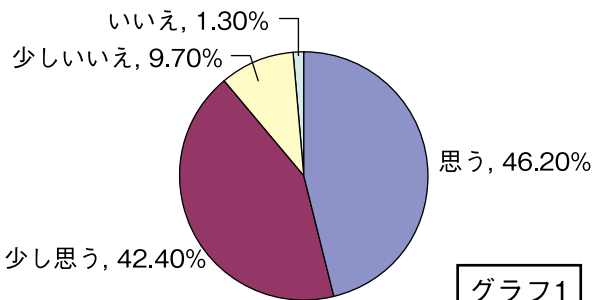
- 1 1 年生の集団宿泊訓練で日本赤十字社福岡県支部の方を講師に招き、心肺蘇生講座を実施した。
- 2 ボランティア清掃を生徒会の美化委員会と連携をして、生徒会から呼びかけをすることで、自主的活動として組織できた。
- 3 文化祭では、青少年赤十字活動に関する展示会場を設け、取り組んだ内容をパネル展示した。また、当日には生徒と職員が赤十字のバッヂを胸につけ、募金活動を行うなど、青少年赤十字活動の実践を保護者や地域の人などにアピールした。
- 4 学校通信で、取り組んだ内容、成果を保護者に伝えた。また、地域との交流会などで本校の取り組みを紹介をした。

活動の成果

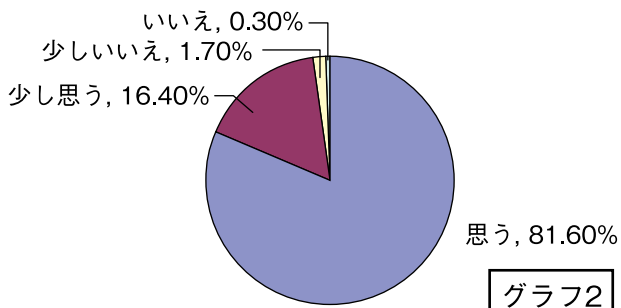
- 1 モデル校として指定を受けたことで、校内の協力体制が確立し、青少年赤十字活動を実践する上で職員間の連携がより密接に図られるようになった。
- 2 モデル校予算でプリンター、デジタルカメラ、ビデオなどを購入し、活動を記録に残した。また、掲示やアピール活動に利用し、多くの人に活動内容を広めた。
- 3 自分達でできる活動の実践として、学校内外の清掃活動や募金活動などを始めるなど、ニーズ発見から実践することができるようになった。
- 4 職員全体が青少年赤十字活動の取り組みの内容や意義を理解し、ボランティア清掃などに積極的に参加した。
- 5 文化祭終了後、保護者がペットボトルキャップを多量に持ってきた。また、文化祭では、有志が自分から進んで学校全体を回り、募金活動を行った。

モデル校指定後の変化

ボランティアに参加したいと思いますか。



ボランティアは、社会のために必要だと思いますか。



グラフ1より、ボランティアに参加したいと思っている生徒は、88.6%いることがわかる。また、グラフ2より、ボランティアは社会のために必要だと思っている生徒も、98%いるこ

とがわかった。このことから、生徒の中に気づき、考え、実践しようとする意識が出てきたのではないかと考えられる。

表1は、「ボランティア活動でどんな気持ちが得られますか。」と聞いた時の結果である。これから、生徒たちは前向きな姿勢であることが分かる。また、表2から、生徒がボランティアの意義を理解し、目標を持って行動するようになったことが伺える。

今後の取り組みの見通し

- 1 地域の青少年赤十字活動の拠点として、中学校校区内小学校の加盟を働きかけ、小中一貫としての活動を組織していく。
- 2 ボランティア清掃について、地域住民との協働を目指し、PTAなどに呼びかけをし、若宮中学校区の取り組みにする。
- 3 国際理解に関する内容を生徒会活動に位置づけ、総合的な学習の時間と連携する。
例えば、北九州教育事務所のALTや宮若市に配属のALTを講師として招き、異文化に触れさせる。あるいは、福岡市で行われているアジアの人々の交流に参加させ、文化の違い、同年代の子どもの考え方を学ばせる。

選考員のコメント

中学校の3年間計画的に、身の回りにある人権課題、平和、社会的弱者など様々な「境界線」の存在に気づき考えることは、生徒一人一人の人道的価値観を高める。その上でさまざまなJRC活動をされている。

生徒自ら、学校内外でニーズに気づき自分たちにできることを考え、ボランティア活動が実践できるようになったことは大きな成果である。

ボランティアを終えての感想から

表1

項 目	割 合
ボランティア清掃すると、楽しい。	33%
ボランティア清掃は友達と同じ目的で行っているという仲間意識ができた。	34%
ボランティア清掃をしているとき、社会に奉仕している実感がある。	32%
その他 ・参加していないので分からない。 ・ボランティアのやり方が分からない。など	2%

表2

積 極 的 な 意 見	割 合
・地球がきれいになるからしたい。	2.9%
・社会に貢献できるから。	3.8%
・社会に必要である。	19.0%
・達成感が得られた。	15.0%
・人の輪が広がった。	10.8%
・挨拶「ありがとう」をされてうれしかった。	9.0%
・大切だと思う。	14.0%
・少しでも町がきれいになるからしたい。	3.0%
・自分が役に立ったと思った。	15.0%
・地域との関係が良くなる。	2.8%
消 極 的 な 意 見	割 合
・何回してもゴミがたまるから同じ。	1.3%
・部活があるからできない。	1.3%
・関心がない	1.3%
・やってみたくもない。	1.3%
・面倒だからいやだ。	0.8%

高等学校の部



人間として互いに尊重しあい、助け合う思いやりの心を育てる 周囲のニーズに気づこう、自分のできることを考え実行しよう

茨城県 県立多賀高等学校

活動の種類

健康・安全、奉仕、
国際理解・親善

活動の単位

委員会・同好会

活動期間

通年

教育課程上の主な位置づけ

生徒会活動

活動のねらい

私たち日本人は平和が当たり前の生活をしているが、世界には、悲惨な状況にある子供たちがいることに気づき、同じ人間として、助け合い支えあうことの大切さを知り、自分たちのできる支援を考える。清掃活動や献血運動を通して、自分の周りのニーズに気づき、実行していくことを身につける。今年は特に東日本大震災で被災した人々のためにできることを考え、実行していく。これらの活動を通して、思いやりの心を育て、助け合うことの大切さを知らせる。

具体的な活動内容

1. 健康・安全

① 献血

・校内で献血車による献血を行う。献血の案内とともに、茨城県の献血状況や若者の献血状況を説明し、献血の必要性を訴える。「8月の二重奏」を通して、献血の重要性に気づかせることができた。また、12月19日に、1年生を対象に、「献血セミナー」を実施し、献血への理解と関心を深めることができた。日立市の「献血ルームさくら」において、献血キャンペーンのボランティアも行う。支部主催で行うものの他に、本校でもキャンペーンを行って、献血への協力を呼びかけた。

2. 奉仕

① Clean Up 大作戦という通学路の清掃を、朝の授業前に、年間5回行う。そのうち1回は日立製作所日立事業所国分環境管理グループ（日立国分）の方々と合同で実施している。地域との交流も図っている。



clean up 大作戦

② JR 東日本の常磐線常陸多賀駅の清掃を行った。常陸多賀駅は生徒が通学に利用する駅である。駅員さん達は忙しく、なかなか細かいところにも手が届かないということで、普段手の届かないようなところも丁寧に清掃する。年に何度か実施している。

③ 多賀駅から学校までの通学路を、時間をかけて清掃した。

④ 夏休みや春休み・冬休みを利用して、特別養護老人ホーム「日立市萬春園」を訪問したり、日立市母子療育ホームという重度障害児の母子通園訓練施設を訪問したり、夏祭りなどのボランティアを行う。また、「つくしんぼ保育園」や「ひがしなるさわ幼稚園」を訪問する。お年寄りや子どもたちと接し、いろいろな方たちとのふれあいの中で相手の立場になって考え、行動することを学ぶ。

3. 国際理解・親善

① ザンビアのルサカにある「カシシこどもの家」という養護施設に、靴を送る活動をしている。卒業生が卒業時に使わなくなった体育館シューズやグラウンドシューズを置いていってくれるので、それを洗って、箱詰めにして送っている。今までに82箱送った。送料は、募金や古紙回収で得た代金でまかなっている。卒業生が、靴をザンビアに送ることは、定着しつつある。先生方も、協力してくれている。また、小さなお子さんのいる先生は子供用の靴を寄付してくれるなど、ザンビアに靴を送る活動は学校全体に広がっている。今年の1月23日にザンビアで医療活動をしながらか、「カシシこどもの家」を援助する活動を20年もされている杏林大学の堤先生に来ていただき、講演会をしていただいた。

② エコキャップ（ペットボトルのキャップ）を回収し、「世界の子どもにワクチンを日本委員会」を通じて、ワクチンを受けられない世界の子どもたちにワクチン代として送る。本校では、各クラスに回収ボックスを置き、JRC委員が毎週回収してくる。エコキャップはリサイクル業者に買い取ってもらい、その代金をワクチン代として送る。

③ 「保健医療支援事業の大切さを学び、伝える校内活動」として、アフリカのタンザニアでコンゴ・ブルンジ難民支援事業で活動されている山内さんと国際電話を通じて、電話対談を行った。事前に生徒から質問を聞いてまとめておき、直接国際電話でお話を聞いた。質問も時間が足りなくなるくらいたくさん出て、生徒たちが日本人がタンザニアで働いていることにとても興味を持ったようだ。活動の様子や、タンザニアの人達の様子が伝わってきた。国際理解につながる活動だった。



ザンビアに送る靴を洗う

4. その他特色ある取り組み

- ① “Candle Night in Taga”: “Candle Night in Taga”は、キャンドルの光の中で、エコの話を聞き、演奏を聴きながら、エコについて考えるイベントで、ボランティア同好会が主催している。会場を照らすキャンドルは日立市立特別支援学校の児童生徒たちと一緒に作ったもの。



Candle Night でのアカベラ演奏

② “We are One!” Project

2011年3月11日の東日本大震災で被災した方々のために、私たちが「心をつなげて頑張ろう」というProjectで、募金活動や支援物資を送るだけでなく、節電の意味も込めて、自分たちの手作りキャンドルや“One”を織り込んだミサンガを販売し、その売上げを義援金として送った。

- (1) 東日本大震災の被災者への義援金のための募金活動をした。(4月30日)
- (2) 宮城県気仙沼市の中学校に避難している中学生のために支援物資を送った。



“We are One!” Project の取り組み

活動のポイント

「気づき・考え・実行する」という態度目標の中で、まず周囲の必要に気づくことを大事にしたいと思い、生徒から提案された活動はほとんど実行した。生徒からの提案は、通学路の清掃・エコキャップの回収・施設訪問・国際電話対談などである。エコキャップの回収や通学路の清掃、国際電話対談は、リーダーシップトレーニングセンターでのワークショップで立てた計画である。また、今年は特に、東日本大震災で被災した人々のために、「心をつなげてがんばろう」ということで、“We are One!” Projectを企画した。それは、キャンドルやミサンガを製作・販売して、義援金として送ろうというもので、自分たちのできることをしようと考え、実行してきたものである。

さらに活動上のポイントは、全校生徒にもできるだけ、声をかけ、協力してもらい、学校全体で取り組めることは、学校全

体で取り組むようにしたことである。献血や募金活動、支援物資を送る活動、エコキャップの回収や古紙の回収、東日本大震災で避難していた高校生へのメッセージカードの作成、そして、ザンビアに送る靴を置いていってもらうことなどである。

また、いろいろな活動をするのに、日立市役所や多賀市民プラザ、百年塾、日立市内の交流センター、水戸青少年会館、水戸市役所、茨城県立図書館など、多くの地域の方々に協力をしていただき、地域との交流を深めることができた。また、日立市母子療育ホームをはじめ、保育園や幼稚園、特別養護老人ホーム、日立市立日立特別支援学校など、様々な施設の方々にも多くのご協力をいただいていた。特に日立市立特別支援学校では、キャンドル作りをPTAの行事に入れてくださり、学校全部で協力して下さっている。私たちの活動は地域の人々に支えられていることを実感する。

活動の成果

本校ではJRCは委員会活動で、自主的なボランティア活動はボランティア同好会が行っている。校内での募金活動や献血運動はJRC委員会、校外での様々なボランティア活動はボランティア同好会が行っている。モデル校になった初年度の「国際電話対談」では、アフリカのタンザニアで難民支援事業担当として働かれている日赤の山内千絵さんと対談を行ったが、質問を全校生徒から出してもらった。また、ザンビアの「カシシ子どもの家」を20年以上支援してこられた堤先生の講演会「いのちについて思うこと ～できることから～」を通して、アフリカのザンビアの子供たちの様子を聞くことができた。卒業時に、体育館シューズやグラウンドシューズを置いていき、ザンビアに送るのは定着してきた。エコキャップの回収も、クラスごとに集計し、意識を高めてもらおうと努力している。これらの活動を通して、世界に目を向けて、まだまだ困難な状況にある子供たちがいることに気づき、自分たちにできることをしようという思いが全校生徒に広がってきたと思われる。

ボランティア同好会は“We are One!” Projectを行ったが、募金活動や支援物資を送る活動、メッセージを送る活動などは全校生徒に呼びかけ、協力してもらった。痛みを分かち合い、助け合うこと、絆を深めることなどにも、積極的に参加してくれた。

血液センターによる「献血セミナー」を聞くことができ、献血への理解がより深められ、命の大切さを学んだ。例年では校内での献血は献血バス1台であったが、今年は献血バスを2台にすることになるなど、献血への関心も高められた。

他にも年5回行っているClean Up大作戦という通学路の清掃も定着し、学校全体に奉仕の精神が養われてきていると思われる。

モデル校指定後の変化

助成金のおかげで、「国際電話対談」が実現し、今までのJRCは、献血と募金とClean Up大作戦だけであったが、国際理解・親善という活動に幅を広げることができた。エコキャップやザンビアの「カシシ子どもの家」に靴を送る活動などで、世界に目を向けた活動が全校に広がってきている。また、助成金でスチールの棚を購入し、生徒が置いていってくれた体育館シューズやグラウンドシューズ（数百足はあると思われる）をきちんと整理することができ、活動がしやすくなった。また、Clean Up大作戦時はブルゾンを着て、清掃活動に取り組み、地元の人々に私たちの活動を知ってもらうことができた。このように活動が活発になることで、JRC委員会の活動やボランティア同好会の活動が、全校生に浸透してきたように思う。そして、ボランティアの精神（奉仕の精神）を持つ生徒が増えてきて、困っている人がいると、さりげなく手伝ってくれる生徒が増えてきたと感じる。JRC委員会やボランティア同好会の活動が活発になることで、人間として互いに尊重しあう気持ちや助け合う思いやりの心を育てることにつながってきたように

思われる。

今後の取り組みの見通し

JRC 委員会としては、献血の大切さをアピールし、献血者を増やして、献血バスを2台にする。

Clean Up 大作戦、募金活動などは今まで通りで行う。本校は部活動が盛んなので、昨年度実施できなかった「三角巾の救急法」を、今年はぜひ実施し、いざというときの救急法を身に付けてもらいたい。ボランティア同好会は、東日本大震災で被災した方がたを忘れず、“We are One!” Project を継続していく。さらに自分たちのできることを考え、実行していきたい。ボランティア同好会は活動が活発になったせいか、新入部員が31名も入り、44人になった。人数が増えたことで活動をさらに広げられそう。可能であれば、被災地に行って、私たちにできるボランティアを行いたいと思う。地元との交流も大事にし、地元のためにもできることには、積極的に参加していきたい。施設訪問も貴重な体験なので、充実させていきたい。今年度からは掲示板を有効に利用し、ボランティアの情報を全校生にPRし、ボランティアの精神がさらに広がるように努力したい。今年は文化祭があるので、そこでも私たちの活動を知ってもらうことと、全校で何か取り組めることがあったら、全校に呼びかけて実行していきたい。そしてさらに私たちの活動を通して、互いに尊重しあい、思いやりの心を育てていきたい。

選考員のコメント

JRC 委員会が校内での募金活動や献血活動を行い、通学路や最寄りの常磐線常陸多賀駅の清掃活動、長期休業等を利用し福祉施設の訪問等のボランティア活動にボランティア委員会が取り組んでいる。

その他に、エコキャップの回収・国際電話対談・東日本大震災の被災地の方々への継続的な支援・日立市や多賀市など多くの地域の方々との交流活動など生徒が主体となり気づき・考え・実行する素晴らしい実践である。

幼・小・中学校の部



「気づき」「考え」「実行する」ことができる思いやりの心を育てよう ～学校の特色をいかした JRC 活動を通して～

沖縄県 座間味村立阿嘉幼・小・中学校

活動の種類	活動の単位	活動期間	教育課程上の主な位置づけ
健康・安全、奉仕、国際理解・親善、赤十字の理念の学習	全校	通年	学校裁量、総合的な学習の時間、特別活動

活動のねらい

- JRC ボランティア活動を通して、児童生徒一人一人に、共に助け合うことや勤労生産の喜びを体得させ、社会奉仕の精神を育てる。

具体的な活動内容

1 年間活動

JRC 登録式

毎年第1回目の活動には、JRC 登録式をおこなっており、みんなで息を合わせ大きな声で誓いの言葉をのべます。

毎年、地域の賛助奉仕団の方々が来て下さり、阿嘉校の昔の JRC 活動についてお話を聞きます。

これを私たちも、後輩にしっかり受け継いで行きたいと思えます。

救急法・蘇生法

ここでは、「健康・安全」における命と健康の大切さを学び、人間尊重の精神を養うことを目指しています。私たちの島は、すぐ近くに海があり、私たち子どもでも人を救うことができるように、みんな一生懸命心肺蘇生法の練習をしています。

朝の清掃活動

阿嘉校は、小中縦割りの委員会で毎朝清掃活動を行っています。8時から8時10分(10分間)までですが、みんなで協力し合い、自分できることを見つけ、取り組んでいます。

ノーチャイム運動

小・中で授業の開始・終了時間が異なるので、私たちの学校は、ノーチャイムで学校生活を送っています。5分前行動で時計を見ながら教室の移動を行い、授業を受けるようにしています。

牛乳パックのリサイクル

牛乳パックのリサイクルも毎日行っています。小学校低学年も上手にパックを開くことができます。

牛乳パックは、生協に送りリサイクルしています。

浜のゴミ拾い

いつも、きれいだと思っていた浜には、たくさんの漂流物や観光客が捨ててしまったゴミが散乱していました。

ぼくたちが住んでいる阿嘉島をきれいにすることは、大事なことです。進んできれいにしていけば、みんなにもその気持ちが伝わると思えます。

ウドンの木周辺清掃

私たちが生まれる前から、いつも島の人を見守っているウドンの木。私たちは、木の周辺やいつも登校している道もきれいにしています。

花いっぱい運動

学校の花も、自分たちで育てます。みんなで協力してやると、

あつという間にたくさんの花を植えることができました。また、平成23年度は、天然記念物の鹿に花が食べられないよう、鹿が校内に入れないようにと、学校の周りに柵ができました。そのおかげで、色とりどりの花を育てることができました。花いっぱい阿嘉校にしていきたいと思えます。

運動会・学習発表会の案内状、福祉年賀はがき

運動会、学習発表会は、地域のお年寄りも私たちを孫のように応援してくれます。だから、私たちの手作りの案内状や年賀状を毎年送っています。地域のお年寄りのみなさんは、いつも私たちを温かく見守ってくれています。

活動のポイント

- ・赤十字ステッカーを購入し、「花いっぱい活動」時にプラバンに貼って活動の啓蒙を図る。
- ・赤十字の講話・講習会を通して、「健康・安全」「奉仕」についての心の育成を図る。
- ・地域のお年寄りのみな様に、学校行事等への案内状や年賀状を送り、児童生徒とお年寄りの交流を図る。
- ・「先見の重視」「指示のない生活」等の意識の高揚を図るために、ノーチャイム運動を推進する。

活動の成果

- ・阿嘉校は、僻地離島校である。そのため、2年から3年間で、職員の異動がある。初めて JRC 活動に携わる職員も少なくない。モデル校の指定を受けたことで、児童生徒や教職員全員が JRC の歴史や活動理念を学ぶことができた。
- ・本島への移動手段のほとんどが船である。助成金による補助のおかげで、本島で行われる報告会や研修会への積極的な参加希望者が増えた。学習の機会をたくさん得ることができた。
- ・児童生徒と地域のお年寄りとの交流を持つことができた。子どもたちの様子を島全体で見守る様子がうかがえた。
- ・JRC 活動を行うことで、島の自然のよさに気づき、大事にしていこうとする心構えができた。そして、浜の清掃をみんなですること、島の自然を大切にしようとする心情を育むことができた。

モデル校指定後の変化

- ・指定前と比べ、活動用具がそろってきた。そのため、児童生徒が進んで活動しやすい環境ができた。また、児童生徒が進んで活動しようとする姿を見ることで、児童生徒や教師の JRC に対する関心も高まり、校内活動の活性化へとつながっていった。
- ・地域のお年寄りとの交流が案内状や年賀状などの活動を通して、持てるようになった。また、平成23年度は「ふれあいの椅子」を助成金で発注し、みんなで協力し合ってベンチを作り、地域のお年寄りが畑仕事や散歩の休憩場所に利用できるよう、ウドンの大きな木の下に2台のベンチを設置し、贈呈した。地域のお年寄りに

- ・対する思いやりの心を育むよい機会となった。
- ・ビデオ機材による活動の啓蒙を図ることができた。



ベンチ作成 1



ベンチ作成 2



ベンチ贈呈式

今後の取り組みの見通し

- ・「気づき・考え・実行する」という青少年赤十字の態度目標の精神を、教科や道徳、総合的な学習の時間、特別活動などにも活かすとともに、子どもの自主的活動を促す教育活動の場や方法、手段を検討・実践していく。
- ・赤十字のネットワークを活かして、賛助奉仕団や地域の赤十字奉仕団の協力を求め、活動の幅を広げていく。

選考員のコメント

阿嘉校は沖縄本島から西の離島、阿嘉島にある学校である。学校の先生方は青少年赤十字の歴史や理論を研修し、子どもたちが島の自然の良さに気づく指導を試みている。ノーチャイム運動、浜のゴミ拾い、小中縦割りの委員会による毎朝の清掃活動、地域のお年寄りとの交流など校内が活性化する素晴らしい取り組みである。

なにより、青少年赤十字活動により地域の自然のよさに気づき、大切にしていこうとする素晴らしい実践である。

著名人の言葉

Phrases on the Red Cross Movement by the World celebrities

人に与え又は人を助ける場合、相手にみじめさを感じさせないことが肝要である。いかにも犠牲を払うかのような顔をせず、愉快的顔をしなければならない。

愉快さは感染するもので、相手方の気分を楽にさせる。あまりにも不幸の多いこの世の中に、多少でも幸福をもたらすことをやっているのだと考えれば、そうすることはむずかしいことではない。

ジャン・S・ピクテ
(元赤十字国際委員会副委員長)

日本赤十字社本社・各都道府県支部所在地一覧

本社・支部名		所在地	電話番号
本 社	105-8521	東京都港区芝大門 1-1-3	03-3438-1311
北海道支部	060-0001	北海道札幌市中央区北 1 条西 5	011-231-7126
青森県支部	030-0861	青森県青森市長島 1-3-1	017-722-2011
岩手県支部	020-0021	岩手県盛岡市中央通 1-4-7	019-623-7218
宮城県支部	981-0914	宮城県仙台市青葉区堤通雨宮町 4-17 宮城県仙台合同庁舎	022-271-2251
秋田県支部	010-0922	秋田県秋田市旭北栄町 1-5	018-864-2731
山形県支部	990-0023	山形県山形市松波 1-18-10	023-641-1353
福島県支部	960-1197	福島県福島市永井川字北原田 17	024-545-7997
茨城県支部	310-0914	茨城県水戸市小吹町 2551	029-241-4516
栃木県支部	320-8508	栃木県宇都宮市若草 1-10-6 とちぎ福祉プラザ内	028-622-4326
群馬県支部	371-0833	群馬県前橋市光が丘町 32-10	027-254-3636
埼玉県支部	330-0064	埼玉県さいたま市浦和区岸町 3-17-1	048-789-7117
千葉県支部	260-8509	千葉県千葉市中央区千葉港 5-7	043-241-7531
東京都支部	169-8540	東京都新宿区大久保 1-2-15	03-5273-6741
神奈川県支部	231-8536	神奈川県横浜市中区山下町 70-7	045-681-2123
新潟県支部	951-8127	新潟県新潟市中央区関屋下川原町 1-3-12	025-231-3121
富山県支部	930-0859	富山県富山市牛島本町 2-1-38	076-441-4885
石川県支部	920-8201	石川県金沢市鞍月東 2-48	076-239-3880
福井県支部	918-8011	福井県福井市月見 2-4-1	0776-36-3640
山梨県支部	400-0062	山梨県甲府市池田 1-6-1	055-251-6711
長野県支部	380-0836	長野県長野市南県町 1074	026-226-2073
岐阜県支部	500-8601	岐阜県岐阜市茜部中島 2-9	058-272-3561
静岡県支部	420-0853	静岡県静岡市葵区追手町 44-17	054-252-8131
愛知県支部	461-8561	愛知県名古屋市東区白壁 1-50	052-971-1591
三重県支部	514-0004	三重県津市栄町 1-891	059-227-4145
滋賀県支部	520-0044	滋賀県大津市京町 4-3-38	077-522-6758
京都府支部	605-0941	京都府京都市東山区三十三間堂廻り町 644	075-541-9326
大阪府支部	540-0008	大阪府大阪市中央区大手前 2-1-7	06-6943-0705
兵庫県支部	651-0073	兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通 1-4-5	078-241-9889
奈良県支部	630-8133	奈良県奈良市大安寺 1-23-2	0742-61-5666
和歌山県支部	640-8137	和歌山県和歌山市吹上 2-1-22	073-422-7141
鳥取県支部	680-0011	鳥取県鳥取市東町 1-271	0857-22-4466
島根県支部	690-0873	島根県松江市内中原町 40	0852-21-4237
岡山県支部	700-0012	岡山県岡山市北区いずみ町 3-30 (岡山県赤十字血液センター別館)(仮社屋)	086-252-8228
広島県支部	730-0052	広島県広島市中区千田町 2-5-64	082-241-8811
山口県支部	753-0094	山口県山口市野田 172-5	083-922-0102
徳島県支部	770-0044	徳島県徳島市庄町 3-12-1	088-631-6000
香川県支部	760-0017	香川県高松市番町 1-10-35	087-861-4618
愛媛県支部	790-8570	愛媛県松山市一番町 4-4-2 (県庁内)	089-921-8603
高知県支部	780-0850	高知県高知市丸ノ内 1-7-45 総合あんしんセンター 1 階	088-872-6295
福岡県支部	815-8503	福岡県福岡市南区大楠 3-1-1	092-523-1171
佐賀県支部	840-0843	佐賀県佐賀市川原町 2-45	0952-25-3108
長崎県支部	850-8575	長崎県長崎市魚の町 3-28	095-821-0680
熊本県支部	861-8039	熊本県熊本市長嶺南 2-1-1	096-384-2100
大分県支部	870-0033	大分県大分市千代町 2-3-31	097-534-2236
宮崎県支部	880-0802	宮崎県宮崎市別府町 3-1	0985-22-4045
鹿児島県支部	890-0064	鹿児島県鹿児島市鴨池新町 1-5	099-252-0600
沖縄県支部	902-0076	沖縄県那覇市与儀 1-3-1 複合管理棟 5F	098-835-1177

青少年赤十字モデル校選考会選考員

平成 17 年度

- (1) 学校教育関係者（青少年赤十字全国指導者協議会役員）
藤井 厚介（会 長：愛媛県今治市立立花小学校校長）
近藤 信一郎（副会長：福井県福井市大東中学校校長）
福永 恒泰（副会長：兵庫県立神戸高等学校校長）
- (2) 日本赤十字社支部職員
山本 佑幸（神奈川支部事務局次長）
- (3) 日本赤十字社本社職員
五十嵐 清（総務局組織推進部長）

平成 18 年度

- (1) 学校教育関係者（青少年赤十字全国指導者協議会役員）
佐倉 國蔵（会 長：京都府京都市立祥栄小学校校長）
小俣 好三（副会長：山梨県大月市立大月第一中学校校長）
広原 啓視（副会長：島根県立大社高等学校校長）
- (2) 日本赤十字社支部職員
畑 喜春（兵庫県支部事務局長）
- (3) 日本赤十字社本社職員
勝村 秀樹（総務局組織推進部長）

平成 19 年度

- (1) 学校教育関係者（青少年赤十字全国指導者協議会役員）
岡部 文尋（会 長：奈良県奈良市立富雄第三小学校校長）
小俣 好三（副会長：山梨県大月市立猿橋中学校校長）
広原 啓視（副会長：島根県立大社高等学校校長）
- (2) 日本赤十字社支部職員
東田 雅俊（兵庫県支部事務局長）
- (3) 日本赤十字社本社職員
勝村 秀樹（総務局組織推進部長）

平成 20 年度

- (1) 学校教育関係者（青少年赤十字全国指導者協議会役員）
西 正夫（会 長：長野県信濃町立柏原小学校校長）
小俣 好三（副会長：山梨県大月市立猿橋中学校校長）
荒川 恭嗣（副会長：秋田県立秋田北高等学校校長）
- (2) 日本赤十字社支部職員
東田 雅俊（兵庫県支部事務局長）
- (3) 日本赤十字社本社職員
勝村 秀樹（総務局組織推進部長）

平成 21 年度

- (1) 学校教育関係者（青少年赤十字全国指導者協議会役員）
西 正夫（会 長：長野県信濃町立柏原小学校校長）
濱村 龍彦（副会長：広島県広島市立国泰寺中学校校長）
飯野 真幸（副会長：群馬県立高崎女子高等学校校長）
- (2) 日本赤十字社支部職員
東田 雅俊（兵庫県支部事務局長）
- (3) 日本赤十字社本社職員
三井 俊介（総務局組織推進部長）

平成 22 年度

- (1) 学校教育関係者（青少年赤十字全国指導者協議会役員）
奥田 誠（会 長：千葉県香取市立府馬小学校校長）
濱村 龍彦（副会長：広島県広島市立国泰寺中学校校長）
中村 清志（副会長：島根県立松江東高等学校校長）
- (2) 日本赤十字社本社職員
三井 俊介（総務局組織推進部長）

平成 23 年度

- (1) 学校教育関係者（青少年赤十字全国指導者協議会役員）
奥田 誠（会 長：千葉県香取市立府馬小学校校長）
濱村 龍彦（副会長：広島県広島市立国泰寺中学校校長）
中村 清志（副会長：島根県立松江東高等学校校長）
- (2) 日本赤十字社本社職員
服部 亮市（総務局組織推進部長）

平成 24 年度

- (1) 学校教育関係者（青少年赤十字全国指導者協議会役員）
中村 正（会 長：青森県南部町立剣吉小学校校長）
櫻井 清人（副会長：群馬県立伊勢崎商業高等学校校長）
本多 雅一（副会長：広島県広島市立五日市南中学校校長）
- (2) 日本赤十字社本社職員
堀 乙彦（総務局組織推進部長）

青少年赤十字モデル校報告書集（平成 24 年度版）

平成 24 年 12 月 25 日初版発行

発行元 日本赤十字社 総務局 組織推進部 青少年・ボランティア課

住 所 〒 105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3

電 話 03-3438-1311(代表) HP <http://www.jrc.or.jp>

国際赤十字・赤新月運動の基本原則

人道 (Humanity)

公平 (Impartiality)

中立 (Neutrality)

独立 (Independence)

奉仕 (Voluntary Service)

単一 (Unity)

世界性 (Universality)

1965年(昭和40年)にウィーンで開催された第20回赤十字国際会議で、「赤十字基本原則」が決議され、宣言されました。

赤十字基本原則は、赤十字の長い活動のなかから生まれ、形づくられたもので、「人間の生命は尊重されなければならないし、苦しんでいる者は、敵味方の別なく救わなければならない。」という「人道」こそが赤十字活動の基本で、他の原則は「人道」の原則を実現するために必要となるものといえます。



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society